



2025年度

公立小松大学

産官学合同シリコンバレー研修 報告書

公立小松大学 地域連携推進センター



# 目 次

1. あいさつ	学長	山本 博	1
2. 研修の概要・スケジュール			3
3. 研修報告			
I. 全体報告	地域連携推進センター長	香川 博之	5
II. 学生参加者の報告			
(1) 生産システム科学部 生産システム科学科 2年	谷口 龍成		7
(2) 生産システム科学部 生産システム科学科 2年	村上 巧真		10
(3) 生産システム科学部 生産システム科学科 3年	田辺 新		12
(4) 生産システム科学部 生産システム科学科 4年	石井 玲央		15
(5) 生産システム科学部 生産システム科学科 4年	伊藤 一航		18
(6) 生産システム科学部 生産システム科学科 4年	川辺 景仁		21
(7) 生産システム科学部 生産システム科学科 4年	綱崎 陸翔		23
(8) 生産システム科学部 生産システム科学科 4年	渡 美鈴		25
(9) 国際文化交流学部 国際文化交流学科 3年	是国 貴斗		27
(10) 国際文化交流学部 国際文化交流学科 3年	久生 獅十		29
(11) 保健医療学部 看護学科 1年	谷内 穂ノ佳		34
III. 企業・行政参加者の報告			
(1) ライオンパワー株式会社	浅井 朋美		37
(2) 株式会社日本オープンシステムズ	中川 裕将		40
(3) 株式会社日本オープンシステムズ	平井 遥斗		43
(2) 株式会社日本オープンシステムズ	深川 志帆		47
(3) 株式会社日本オープンシステムズ	堀岡 ひなの		50
(3) ナック・ケイ・エス株式会社	海道 晃生		54
(4) 小松市	隅山 彰久		57

I like to know you. — 知り合ってよかった。

学長 山本 博

いまや恒例となりました「産官学合同シリコンバレー研修」を本年度も無事上首尾に実施でき、茲に、2025 年度版の『研修報告書』をお届けできる運びとなりましたことをうれしく存じます。顧みますと、

#### 一. 20 周年

わたしが榊本博之 B-Bridge International Co. CEO と知遇を得るきっかけとなりましたのは、ボストンで開催された Bio 2005 というバイオ系のフェアでした。わたしの研究室で開発され、上市した診断試薬について発表しましたところ、関心を示した企業が数社あり、その中に B-Bridge International がありました。発表から 1 週間も経たないある日、金沢のわたしの研究室を訪れたのが、榊本 CEO。現在と同じく、堂々たる巨軀で、決断も早く、その日のうちに商談成立して、B-Bridge International 社にライセンスしました。B-Bridge はバイオ系ディーラーとして夙に有名でしたし、日独英仏米での特許も基礎に、販途は一挙に世界にひろがり、母国にも逆輸入されるようになりました。これが、2005 年のことです。

公立小松大学が開学した 2018 年の 12 月、榊本さんが本学を訪ねて来られました。この折のお誘いをうけて、翌 2019 年 2 月、木村副学長、故真田地域連携推進センター長、川上特任教授とともに、カリフォルニア州 B-Bridge International 社に榊本さんを訪ねました。それまで米国といえば、東海岸のボストン、ワシントン DC、フィラデルフィア、ベセスダなどで切り合うかの体験（学問や外交、人事上ですが）を味わってきたわたしには、西海岸とくにシリコンバレーは風土も人も穏やかで、学生たちを安心して送り込める土地と感じられました。滞在中、単刀直入、榊本さんに「大学のオフィスを置かせてもらえないか」と尋ねました。すると、「いいですよ」との即答。以来、このオフィスが産官学合同研修の拠点となりました。

今年は、榊本さんと知り合ってちょうど 20 周年になります。

#### 二. リピーター

本研修に関係する人同士のつながりでいいますと、二度、三度とくり返しご参加いただいているステークホルダーの存在ほどありがたいものはないとつくづく感じています。具体的には、小松市、ライオンパワー（株）、（株）日本オープンシステムズをはじめとする産官です。これを「リピーター」といわせていただくなら、「リピーター」は、年度・世代を超えた継承につながります。地域をまたぐ連携・協力にもつながります。末長いお付き合いを念願してやみません。

#### 三. クラウドネイティブ

クラウドネイティブとは、情報をクラウド上で共有管理するシステムのことです。たとえば、米国の全医療機関の電子カルテ、いかえると、米国民の診療情報は、Amazon、Google、Microsoft 三社の連携の下に構築された単一プラットフォーム上で管理されています。この国家事業のはじ

まりは、Amazon のベゾスと Google のシュミットの若い頃の立ち話がきっかけだったと仄聞しています。今年度の研修報告会の折、これを話題にしましたのは、知り合った学生同士、学生と社会人のつながりを現在も将来も大切にしてほしい、という思いからでした。

わたしは前任地で、奥能登の病院と大学病院とを遠隔でつなごうとしてはたせなかった苦い思い出があります。もう一息で実現しようかというとき、導入予定の遠隔医療システムと大学病院の電子カルテとに互換性がなく、個々の診療情報毎に原始的な手入力が必要になることが判明したのでした。わが国の医療界の電子カルテは、N 社、I 社、T 社の大手三社のいずれかで、かつ incompatible。共通クラウドの構築にはほど遠く、天を仰ぎたくなりました。能登半島地震・豪雨後の支援で、汎用性のある医療情報としていちばん役立ったのは、ご存知のアナログ情報、「お薬手帳」でした。

9 月の報告会の後、クラウドネイティブの現状はどうか、調べてみました。すると、ようやく、サーバーを院内に置いて各病院が独自に管理するオンプレミス方式から、クラウドネイティブ方式に移行する方針を厚労省が正式に決定したことがわかりました。

この画期的な方向転換をリードした立役者は、わたしの大学の後輩で、わが国医療 DX のオピニオンリーダー、高橋泰国際医療福祉大学大学院教授です。高橋先生には本学客員教授も務めていただいております、クラウドネイティブについてのわたしの知識の多くも彼からの耳学問です。

南加賀地域の病院カルテもぜひにクラウドネイティブ化してほしいと希っています。

#### 四．謝辞

最後に、参加学生全員に奨学金を給付いただきました小松市、事前学修、シリコンバレーでの研修、事後の報告会にご参加いただきました産業界、官界の各位、本学学生、教員、職員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

## 研修の概要

本研修は、現地の企業見学やワークショップなどの実践的な学習を通して、国際感覚を養い、学生はその経験を今後のキャリア形成や進路決定の一助に、社会人は世界をリードする起業文化に触れ、新たな事業展開やキャリアアップに取り組む機会につなげる。

また、学生、社会人がともにワークショップなどに取り組むことで、地元企業、行政の社会人とネットワークを構築しながら、地域の未来を考える。

(1) 開催期間 8月24日(日)～8月30日(土)

(2) 開催場所 アメリカ合衆国カリフォルニア州 シリコンバレー

(3) 参加者 本学学生11名、企業参加者7名、随任教職員2名

学生	生産システム科学部生産システム科学科	2年	谷口 龍成
	生産システム科学部生産システム科学科	2年	村上 巧真
	生産システム科学部生産システム科学科	3年	田辺 新
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	石井 玲央
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	伊藤 一航
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	川辺 景仁
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	綱崎 陸翔
	生産システム科学部生産システム科学科	4年	渡 美鈴
	国際文化交流学部国際文化交流学科	3年	是国 貴斗
	国際文化交流学部国際文化交流学科	3年	久生 獅十
	保健医療学部看護学科	1年	谷内 穂ノ佳
企業・行政	ライオンパワー株式会社		浅井 朋美
	株式会社日本オープンシステムズ		中川 裕将
	株式会社日本オープンシステムズ		平井 遥斗
	株式会社日本オープンシステムズ		深川 志帆
	株式会社日本オープンシステムズ		堀岡 ひなの
	ナック・ケイ・エス株式会社		海道 晃生
	小松市		隅山 彰久
随 行	地域連携推進センター	センター長	香川 博之
	生産システム科学部生産システム科学科	教員	上野 祐亮

## 研修スケジュール

日程	日付	曜日	時刻	
1	8月24日	日	14:20 17:25 12:30 13:00 15:00 18:00	成田国際空港集合・出国手続き 成田国際空港出発 ～以下、米国時刻～ サンフランシスコ国際空港到着・入国手続き 宿泊先ホテル到着、昼食、周辺散策等 【オリエンテーション】講師：公立小松大学特任教授/B-Bridge International, inc. CEO 榎本博之 氏 夕食等
2	8月25日	月	9:00 10:45 12:00 13:15 15:30 18:00	【レクチャー】講師：公立小松大学特任教授/B-Bridge International, inc. CEO 榎本博之 氏 ＊オリエンテーション シリコンバレーってなに？ 【レクチャー】講師：HelloSake CEO, DoorDash エンジニア 原健太 氏 昼食 【カルチャー&歴史探訪】 ＊Apple Park Visitor Center, Google Visitor Center 【グループ行動】 team-mens：NVIDIA ソフトウェアエンジニア 岡田ケン氏との面会、マルゲリータ：小売店の散策とアンケート調査 Switch：Google Visitor Centerにてアンケート調査、ボールボーイ：STS Innovation, Inc.CEO 岸田陽世志氏と面会 夕食等
3	8月26日	火	9:30 12:00 13:30 14:00 14:30 16:00 18:00	【大学訪問】Stanford University ＊グループ行動による、フィールドリサーチ ほか 昼食 【企業訪問】Intel Museum ＊グループ行動による、フィールドリサーチ ほか 【視察】Levi's Stadium 【企業訪問】B-Bridge社 公立小松大学サテライトオフィス 【グループ行動】 team-mens、マルゲリータ：B-Bridge社サテライトオフィス Switch：B-Bridge社サテライトオフィス、三育学院サンタクララ校の見学、ボールボーイ：Western Digital 高橋佑介氏と面会 BBQ（夕食）[Ponderosa Park]（夕食）
4	8月27日	水	8:00-20:00	【サンフランシスコ・ベイエリア 視察】 ＊各グループ訪問先での視察や見学、アポイントを取ったの面会、課題解決に向けたインタビューやアンケート調査 ＊主な訪問先：サンフランシスコ市庁舎、カストロ地区、サンフランシスコJapan town、アルカトラズ島 Fisherman's Wharf、ゴールデンゲートブリッジ、ユニオンスクエア、カリフォルニア科学アカデミー
5	8月28日	木	9:00 10:00 12:00 14:00 15:00 17:00	【発表準備】グループごとに資料作成、発表内容準備 【座談会】MedVenture Partners シニアアドバイザー 周佐泰子氏 など 昼食 【グループ行動】マルゲリータ：Mitsuwa Meketplace 岸本ヤスアキ氏と面会 【プレゼンテーション】グループ、個人での研修成果報告 ＊グループでの発表：課題解決策の探究のため研修中に行ったグループ行動とその成果など ＊個人での発表：印象に残った体験、マインドの変化、研修を通して得たことなど 【懇親会】関係者および現地在住ビジネスパーソンとの懇親会（夕食） KokiYoshida氏（Meta社Engineer）、YuichiroSuzuki氏（Google社Engineer）、MichaelChang氏（Apple社Engineer） ShinyaFujimoto氏（Magnote社CEO）
6	8月29日	金	8:10 9:30 11:55	宿泊先ホテル出発 サンフランシスコ国際空港到着・出国手続き サンフランシスコ国際空港出発
7	8月30日	土	15:00 16:00	～以下、日本時刻～ 成田国際空港到着・入国手続き 成田国際空港解散

## 事前研修について

4月～8月にかけて実施（学生のみを対象とする事前研修を含む）

日程	日付	曜日	時刻	内容
1	6月18日	水	16:30-18:00	第1回「事前研修①」 榎本博之特任教授による現地研修に向けた事前研修、自己紹介、グループ分けなど
2	7月2日	水	15:00-16:30	第2回「学生向け事前説明会」 事務局による研修グループ、スケジュールの確認、手続きの確認など
3	7月2日	水	16:30-18:00	第3回「海外渡航健康講座」 公立小松大学保健管理センターによる渡航期間中の健康管理に関する注意事項など
4	7月26日	土	9:00-10:30	第4回「事前研修②」 榎本博之特任教授による現地研修に向けた事前研修、現地プログラム確認、グループミーティングなど
5	7月30日	水	16:30-18:00	第5回「危機管理セミナー」 外部講師による海外渡航期間中の危機管理に関する注意事項、渡航時に必要な手続きなど
6	8月8日	金	13:00-14:30	第6回「全体オリエンテーション・事前説明会」 前半：榎本特任教授によるオリエンテーション及び事務局による手続き・準備等の再確認、研修に向けた確認事項や注意事項の説明 後半：グループに分かれ、現地でのグループ行動の計画立案などのミーティング

## 2025 年度 産官学合同シリコンバレー研修について

地域連携推進センター長 香川博之

本年度の研修は、榊本博之特任教授（B-Bridge）の支援のもと、8月24日から30日にかけて実施されました。昨年とほぼ同じ時期で、今回が5回目の開催になります。

本研修の目的は、大小さまざまなベンチャー企業が集積し、イノベーションの源泉となっているシリコンバレーを訪問することで、その空気を肌で感じながら、グローバルに活躍・挑戦するためのマインドセットを養うことにあります。また、企業・行政・大学の交流を通じて、新たなイノベーションの創出を目指すことも重要な目標です。本年度は、「イノベーションの震源地シリコンバレーで人生を変える一週間を！」をキャッチフレーズに掲げ、新しいことに挑戦したい方、海外で活躍したい方、自分を変えるきっかけを求める方々を対象に募集を行いました。その結果、学生11名、企業関係者6名、小松市役所職員1名の計18名が参加し、随員として上野祐亮助教と香川を加えた計20名で出発しました。

昨年度までは、出発前にPBL特別講義「グローバル人材と持続的開発プロジェクト」を実施し、PCM（Project Cycle Management）手法をグループで体験していました。しかし、参加者の都合が合わず、全員が一堂に会することが困難であるという課題がありました。加えて、講師陣のスケジュールの都合から通常授業に組み込むことができず、空き時間を利用した集中講義となっていました。さらに、講義内容と現地研修テーマの乖離も見られたため、今年度はPBL特別講義を省略し、現地研修テーマの設定からスタートするという決断を下しました。国際文化交流学部では、PBL特別講義の履修により単位認定が可能でしたが、PBL特別講義を履修しなくても単位認定が可能との判断が出たことも、変更の一因です。なお、生産システム科学部および保健医療学部では、現時点では単位認定されていません。

昨年度は、現地滞在時間を最大限に活用するため、最終日の発表会を帰国後に実施しましたが、国内での指導が十分に行き届かないという課題が判明しました。そこで本年度は、現地での発表を復活させ、現地ならではのプレゼンスタイルを学ぶ機会を設けました。また、参加者の自主性を尊重し、大学側が研修内容を細かく決めるのではなく、参加者自体が「何をしたいか」、「何を調べたいか」、「どう交渉するか」などを考え、グループ活動を通じて積極的（Proactive）に多様な人々とつながることを重視しました。

航空券の手配も含めて現地集合とする案もありましたが、安全性を考慮し、成田ーロサンゼルス間は大学として全員で行動することにしました。

現地では、ドル高・円安およびインフレの影響で、研修費用は昨年以上に高騰しました。学生には、大学および小松市からの助成があり、個人旅行程度の費用に抑えることができました。

宿泊施設はサニーバールのコリアンタウンにあり、周辺は安全で利便性も高く、設備も充実していました。学生は2人部屋、社会人は個室とし、グループ打合せ用のオープンスペースやPC・プリンタも完備されていました。

気候は日本の夏と似ており、昼間は半袖で快適でしたが、朝晩は気温が下がるため、長袖が必要な場合があります。サンフランシスコでは寒流の影響で、日中も長袖が必要でした。

治安面では、サンフランシスコの一部を除き、概ね安全でしたが、予期せぬ事態に備えた事前研修の重要性を再確認しました。

さて、研修を一通り終えて感じたことは以下の通りです。

まず、研修の認知度向上のため、募集方法の改善が必要です。学生への情報提供はオリエンテーションやポータルサイト、メール等で行いましたが、参加費の高さを理由に見送る学生も多く見られました。企業からの参加は増加傾向にあるものの、研修の存在自体を知らない企業もあり、資料やパンフレットの整備が求められます。

次に、事前交流の促進が必要です。今年度は早期に事前監修を実施し、Slack や LINE などのツールを導入しましたが、グループ内の相談は遅れがちでした。参加者が消極的で、メンバー同士の面識不足が要因と考えられます。

さらに、研修後の成果発信も重要と考えています。出発前の不安とは裏腹に、現地では全員が積極的に活動し、臨機応変に対応できました。帰国時の表情は自信に満ちており、研修の成果が明確に表れていました。国内研修では得られない、現地ならではの経験が参加者の成長に大きく寄与したと確信しています。最終報告会では、学長や市長にも問いかける場面もあり、出発前には想像できないぐらいの堂々としたプレゼンが行われました。今後は、参加者自身による情報発信や活躍も期待されます。

今後に向けては、最終報告資料やアンケート結果をもとに、次年度はさらに意義ある研修へと改善を図ります。参加費の削減も検討課題ですが、費用以上に「ここでしか得られない経験」を重視する参加者を募ることが重要と考えています。

最後になりますが、本研修にご参加いただいた株式会社日本オープンシステムズ、ライオンパワー株式会社、ナック・ケイ・エス株式会社、小松市役所の皆様の皆様に心より感謝申し上げます。また、現地での移動や講話など多大なるご支援をいただいた B-Bridge International および関係者の皆様、学生参加費を助成いただいた小松市にも深く感謝申し上げます。

## シリコンバレーでの1週間

生産システム科学科 2年 谷口 龍成

## 参加経緯

この研修があること自体は1年次から知ってはいたが、海外は言語の面でハードルが高  
いだろうと参加を見送ることにした。2年初めのオリエンテーションで研修の説明会があ  
ると知り、1年次同様不安もあったが、海外の文化や価値観を学生のうちに見ることは自  
分のためになるだろうと考え、説明会に参加した。

説明会では、榎本 博之先生（ヒロさん）がシリコンバレーについて説明してくれた。そこで、この研修に参加する一つのきっかけになったのが、シリコンバレーはアメリカ人よりも、アメリカ以外出身が多く、お互いに英語が完璧ではないので、コミュニケーションが取りやすいとのことだった。そのこともあり、私はこの研修に行くことを決意した。

コミュニケーション

日本では Uber Eats として定着しているが、海外にある Uber は、一般の人が運転するタクシーのようなものである。迎えが来て最初に言われるのは“Hello. How are you?”であり、“I’m fine. Thank you. And you?”と返す。目的地に着いた後は、“Have a nice day”と言われ、“You too”と返す。これはファストフード店でも同様である。中学生時代の授業前後、何百回と英語のあいさつをしていて良かったと思った。日本では店員が「いらっしゃいませ、こんにちは」と言うだけの一方通行に対し、ここでは会話のキャッチボールになっていて、これがあるだけで相手との距離が近く感じた。

英語で伝える

私は英語は得意ではない。しかし、英語を聞いて話さなくてはならない。飲食店で注文するにも、私の英語で伝わるのだろうかと不安だった。だが、私の英語で注文が伝わった。小さなことではあるが、私は英語が伝わったことがうれしかった。中学英語だけで伝わると聞くとあるが、確かに伝わるのである。

## 日本とアメリカにおける雇用の違い

研修2日目に、ヒロさんと原 健太さん（けんちゃん）の話を聞いた。日本では、従業員を辞めさせるのは簡単ではない。一方、アメリカでは At-will 雇用と言う、いつでも従業員を辞めさせることができるものがある。これは、会社としては良い人材を採用でき、従業員としては自身の頑張りが反映されるのである。

## プロアクティブ

ヒロさんが研修前から言っていた「プロアクティブに」。受動的ではなく、能動的であることを言うが、私はプロアクティブに動けていなかった。研修中に感想や考えを挙手で言う時間が時々設けられたが、私が手を挙げることは無かった。他の小松大学生や福島高専の方は積極的に発言をしていた。これに関しては、日常に大学生活でも実践できることなので今後努力していく。

## 帰国後

私は帰国後のある日、友人と一緒にテーマパークを訪れた。私たちが写真を撮り終わると、外国人が、写真を撮ってほしいと英語で依頼してきた。私は依頼を引き受け、写真を撮った。この時がもし研修前の私であれば、英語でやりとりをしなければならないことに對し、変に緊張していただろう。しかし、この時の私はなにも動じることがなかった。私はこの研修を通し、英語で話すことに慣れたのだろう。

あ

## 最後に

この研修を通じて、海外と日本の違いを発見するとともに、大学の枠を超え企業、小松市役所の方と楽しく過ごすことができた。もし、一人だけ海外にいけるとなっても私は行かないだろう。だからこそ、今回ご一緒できた方々に感謝申し上げます。私は最終日前日の懇親会で、「アメリカにもう一度行く」と言った。大学生の間はもう一度いけるかわからないが、いつか私はもう一度アメリカに行く。最後になりましたが、今回この研修をご支援いただいた公立小松大学、小松市、ヒロさんを始めとする B-Bridge の方々に御礼申し上げます、結びの言葉とする。



スタンフォード  
大学内教会



アルカトラズ島



バーガーキング



Google

## 産官学合同シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部生産システム科学科 2 年 村上巧真

### 1. 研修に参加した動機

今回私がシリコンバレー研修に参加しようと思った理由は、多種多様な人が集まるシリコンバレーの人たちが、どういった考え方をしているのか、実際に話して知りたいと思ったからである。また、私は自分が今何をしたいのか定まっていない状態にあるので、企業の方や現地の人のお話を通して、将来について考えるきっかけになればいいとも考えた。

### 2. この研修で挑戦したこと

この研修で自分が挑戦したことは、とにかく自分から積極的に話しかけることである。今回の研修ではプロアクティブに動くことがテーマとして挙げられていたこともあり、以前から自分はどちらかというと消極的な面があると感じていたため、この研修期間中に少しでもその面を改善できるように頑張りたいと思っていたからである。研修中スタンフォード大学やサンフランシスコ市街でアンケートを取り、インタビューを行った。初めは話しかけるだけでも緊張したが、実際声をかけると気さくに話してくださる方が多く、自分たちが思っていたよりも多数の人と会話をする事ができた。私が拙い英語で話しかけても多くの人が聞き取ろうと努力してくださり、ほかの人にも話しかけてみようと思える自信につながった。多様な人種が集まる地域ということもあるかもしれないが、そういった姿勢はコミュニケーションにおいて大事なことだと実感した。

またほかにも事前活動として、linkedin や facebook でアポ取りを行った。今回の研修は、自分で現地の人にアポを取ってお話を聞くといった、自分から行動してスケジュールを決めるところがいくつかあった。その際にも自分からいろんな人にメッセージを送った。スケジュールが合わなかったり、返ってこなかったりすることがほとんどで結果としてアポイントメントはとることはできなかったが、自分から動くことができたのでいい経験だったと感じている。

### 3. 現地で学んだこと

シリコンバレーにいる人と話して感じたことは、二つある。一つ目は、みな失敗を恐れないということだ。最近では改善されたが日本では転職というところかマイナスなイメージがあることがあるが、シリコンバレーではキャリアアップといった感じで転職は普通のことという認識だった。一番聞いて驚いたのは、仕事が振られたときにできるかどうかわからなくても、とりあえずできますと言ってやってみるということだった。それがいいかどうかは差し置いて、挑戦に対する姿勢にとっても驚いた。私はどちらかというと、できるという自信がなければ動くことができないので、そのような前向きな姿勢は見習っていきたいと思った。現地の人と話して感じたのは、みんな自分に自信をもっているということだ。そういったところが自己主張や積極性につながっているのだと思った。

二つ目はコミュニケーションの大切さである。私たちはスタンフォード大学とサンフランシスコ市街でアンケートとインタビューを行った。はじめは変な人だと思われて相手にされないのかと思っていた。しかし実際には、ほとんどの方が笑顔で答えてくださりたくさんの方に声をかけることができた。日本でもし同じことをしても同じような結果にはならないと思った。日本と比べてコミュニケーション能力の高さを実感した。シリコンバレーでは多国籍の人々が集まるので、文化や価値観が異なる仲間と協力して仕事をしなければならない。そんな中で大事な自分の考えをはっきりと伝えること、そして相手の意見をしっかり受け止めることだと気付いた。知識や技術があってもそれを伝えることができなければ活かすことができないので、コミュニケーションは大切だと改めて実感した。対話は信頼関係を築くことにもつながるのでなくてはならないものと思った。シリコンバレーで働いている方に仕事のことを伺ったところチームで動くことが多いと聞いたので、なおさら自分の考えを主張することができなければ必要性を感じた。



Intel での集合写真



Nvidia の岡田さんとの写真

#### 4. まとめ

今回シリコンバレー研修に参加して一番実感したのは日本とアメリカの考え方の違いである。アメリカでは個人の自由や自己主張を重視している。それに対し日本は集団での協調性を重視している傾向にある。特に日本とアメリカのベンチャー企業は大きく違う点がある。それはスピード感の違いである。アメリカでは小さな失敗を容認していて、とりあえずやってみるというスタンスである。そして年齢役職関係なしに良いと思った意見を採用したり導入したりしている。日本では稟議といった段階を踏む必要があり、何をするにも時間がかかってしまう。その分慎重に物事を進めることができるというメリットがある。どちらがいい悪いというわけではないが実際シリコンバレーの方からお話を聞いてすごく違いを感じた。

#### 5. 最後に

この研修は自分にとって忘れられない経験となった。自分の将来を考えたとき以前よりも広い視野を持つことができたと思った。考え方から生活まで何もかもが日本と違いすごく刺激を感じることができた。このような貴重な経験を学生のうちにできてよかったと思う。

## シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部生産システム科学科 3年 田辺新

### 1. はじめに

私は今回、令和7年度産官学合同シリコンバレー研修に参加した。

参加を決めた理由は大きく二つある。一つ目は、自分を変えたいという強い思いからである。これまで海外に行った経験がなく、日本の環境の中で生活してきた私は、自分の視野の狭さを感じていた。異文化の中に飛び込み、積極的に行動することで、新しい挑戦に前向きに取り組める自分へと成長したいと考えた。二つ目は、英語に対する苦手意識を克服したいからである。これまでは英語を学ぶ場面で自信を持つことができなかった。また、英語で会話する機会が少なく、どれだけ自分の英語が通用するのか疑問に思った。そこで、現地の人々と直接コミュニケーションを取り、失敗を恐れず自分の考えを伝える力を養うことで、コミュニケーション能力を向上させたいと考えた。この二つの動機を胸に、私は今回の研修に臨んだ。

### 2. 研修の内容

研修では、シリコンバレー地域にある企業や施設を訪問し、働き方や日本との違いについて学ぶ機会を得た。また、現地の大学を訪れ、学生と直接交流する場も設けられていた。

チームとしては「多様性」というテーマのもと、アンケート調査を行ったり、サンフランシスコでの街頭視察を行い、課題解決に取り組んだ。その中でも特に印象に残っているのは、スタンフォード大学で行ったアンケート調査である。

スタンフォード大学は世界中から優秀な学生が集まる場所であり、活気にあふれた雰囲気に圧倒された。キャンパス内では多くの学生が行き交っており、その中で私たちのチームは街頭アンケートのような形で調査を行った。私は思い切って一人で現地学生に話しかけアンケートをお願いすることにした。これは、研修前に掲げた「積極的に行動する」と「自分の英語力を試す」という目標を実際に試す良い機会だと考えたからである。

最初に声をかけるときは大きな緊張を感じた。英語で話しかけても通じないのではないかと、無視されたり断られたりするのではないかと、という不安が頭をよぎった。しかし、勇気を出して声をかけてみると、思った以上に自然に会話が始まり、相手も快く協力してくれた。その後も一人で挑戦を続け、合計で20人（10グループ）ほどに話しかけることができた。翻訳機をなるべく使わずに会話をを行った。拙い英語だったが、スタンフォード大学生は聞き取ろうと親切に対応してくれたことで、次第に自信が付き、積極的に行動できるようになった。この経験は、私にとって大きな挑戦であると同時に、大きな達成感を得られる出来事となった。



図1 スタンフォード大学でのアンケート調査



図2 スタンフォード大学での写真

### 3. 学んだこと・気づき

この経験を通じて、私は二つの大きな学びを得た。

第一に、勇気を持って行動することの大切さである。最初はためらいや恐怖心があったが、実際に一歩踏み出してみれば、相手は予想以上に受け入れてくれることが多かった。本研修の目的の一つである「プロアクティブ」に行動することで自分の中で作り上げていた「失敗するかもしれない」という壁は、実際には存在しない場合も多いのだと気づいた。挑戦する前から諦めてしまうのではなく、行動することで初めて得られる経験や学びがあることを実感した。

第二に、英語で直接コミュニケーションを取る重要性である。翻訳機を使えば意味を伝えることはできるが、どうしても会話のテンポが遅れてしまい、自然なやりとりが難しくなる。また、アポイントメントを取り、お話しする機会があったが、英語をもっと話せていたら日本出身の方々以外の話を聞けていたかも知れない。

こうした経験を通じて、言葉の正確さよりも、相手に向き合い自分の意思を伝えようとする積極的な姿勢の方が大切であると学んだ。同時に、自分の英語力をさらに磨き、自信を持って会話できるようになる必要性も痛感した。

### 4. 今後の目標

今回の研修で得た学びを、今後の大学生活や将来に生かしたい。

まずは、英語力の向上である。翻訳機に頼らなくても自分の言葉で会話できるように、日常的に英語に触れる習慣を作り、授業だけでなく自主的な学習や会話の機会を増やしていきたい。特にスピーキングの力を鍛えることで、海外の人々と自然に交流できる自分を目指したい。

二つ目は、プロアクティブな姿勢を大切にすることである。研修中、一人で声をかけに行った経験から、行動する前に不安や迷いを感じても、思い切って一歩踏み出すことが新しい学びや出会いにつながると実感した。大学生活の中でも、授業やインターンシップなど、挑戦の機会は数多く存在する。その一つひとつに積極的に関わり、自ら成長の場を広げていきたいと考えている。

## 5. おわりに

シリコンバレー研修は、私にとって挑戦と成長の連続であり、非常に貴重な体験となった。現地での活動を通して、自分の弱点や課題を知ると同時に、挑戦することで得られる自信や達成感を味わうことができた。また、ボリュームのある食べ物を食べたり、野球観戦、買い物に行く時間がとても楽しかった。

最後に、小松大学の学生、先生の方々、参加企業の方々、小松市職員の方、b-bridge の皆様のおかげでとても楽しく、有意義な時間を過ごすことが出来ました。本当にありがとうございました。



図3 ゴールデンゲートブリッジでの写真



図4 チームでのアポイントメント

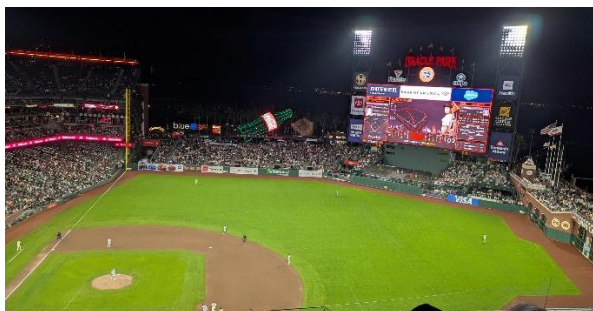


図5 オラクルパークで野球観戦

## シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部 生産システム科学科 4年 石井玲央

### 1. はじめに

私が今回このシリコンバレー研修に参加した理由は大きく2つある。1つは、現在私が4年生で、大学生活最後の年に何か新しいことに挑戦してみたいと考えたからである。私は今までこのような研修に参加するどころか海外にも行ったことがなく、何事においても挑戦するのが苦手な性格だ。そんな自分を少しでも変えたいという思いで参加を決めた。2つめは、自分の英語が本場アメリカの方にどれだけ通じるのか実際に試したかったからである。中学、高校と英語を勉強し、英検などの資格を取ったが、実際に海外の方と話したことがなく、一度自分の言葉で直接海外の方と話してみたいと思っていたからである。この2つの理由から、私は今回シリコンバレー研修に参加した。

### 2. 現地での活動

現地では主に事前に決めていたグループで活動した。私たちのグループは、小松大生が3人と、富山県の企業である日本オープンシステムズから研修に参加されていた社会人の方1人の合計4人で活動した。各グループがそれぞれ課題やテーマなどを決め、それに関するアンケートを実施することや、「LinkedIn」や「Facebook」などのSNSアプリを用いてアポイントを取った人にお話を聞くなどが主な活動内容となる。私たちのグループは事前に「AI」というテーマを決め研修に臨んだ。現地では、NVIDIA という AI の最先端をいく企業の方と奇跡的にアポイントがとれ、お話を伺った。また、スタンフォード大学や、サンフランシスコの街中で人々に声をかけ、積極的にアンケート活動を行った。グループ活動以外では、Apple や Google、intelなどを訪問した。最後にはこれらの研修で経験したことを踏まえて、「AI を用いた外国人向け日本就職エージェントの提案」という題目で事業案を練り発表した。



図1 NVIDIAでのグループ写真



図2 アンケートの様子

### 3. 研修で学んだこと

私がこのシリコンバレー研修で学んだ2つのことについて紹介する。

#### ① コミュニケーションの面白さ、大切さ

まず前提として研修に行く前まで私はコミュニケーションが苦手で、初対面の人とはあまりうまく話せる人間ではなかった。しかし、アメリカに行き、インタビューをする中で現地の人に話しかけると、皆快く私の話を聞いてくれ、つたない英語ではあったが、理解しようとしてくれた。時にはインタビュー活動に対し褒めてくれたりもした。話していると、まるで初めて会った相手ではないかのようで、話していてとても楽しかった。話をしている現地の方は日本人と違い、「察する」ということをあまりしてくれず、自分の思っていることをたくさん伝えてくれる。これが私にとっていい刺激となった。この刺激を元に、発表のプレゼンを作る際も、グループ内で自分の意見をたくさん出し、メンバーとコミュニケーションをとることでより良い発表ができたと思う。この経験から、積極的にいろんな人とコミュニケーションをとり、自分の意見をたくさん伝えることが大事だと学んだ。

#### ② とりあえず挑戦すること

私は今回の研修の中様々な人からお話を伺った。その中で全員が共通しておっしゃっていたことは「とりあえずやってみる」、「おもしろそうだからやってみる」ということだ。私は何をやるにしても下調べなどの準備をする時間が長く、実際に行動を起こすまでの時間が長くなり、時には調べるだけになってしまうことがある。それは失敗することが不安だからである。しかし、お話を聞いていると、「失敗しても誰にも迷惑かからないから挑戦したほうがいい」とおっしゃっていて、当たり前のことだが今までの私では気づかないことだった。何かを成し遂げるにはまず挑戦しなければ始まらないので、今回この研修に挑戦できたようにこれからは様々なことに「とりあえず挑戦」してみることが大事だと学んだ。

### 4. まとめ

今回の研修では、様々な学びがあった。またこの研修に参加しなければ間違いなく出会えなかった様々な素晴らしい方々とも出会えた。この5日間の経験は私の大学生活の中で間違いなく1番濃密な5日間となった。研修で受けた刺激を忘れずに、プロアクティブに活動していこうと思った。これからは自分が持っている希少性を磨き上げ、世界で活躍できる人材を目指す。この報告書を読んで少しでもシリコンバレー研修に興味を持った方がいればぜひ挑戦してほしい。

## 5. 最後に

ヒロさんやミワさんをはじめとする、この研修に携わってくださった B-Bridge の方々、大学職員、企業・小松市役所の方々、一緒に研修に参加した学部生の皆様、そして現地で出会った方々に心より感謝を申し上げます。とても楽しく、有意義な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

## 2025 年シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部生産システム科学科 4 年 伊藤 一航

### 1. 研修に参加した動機

今回の研修に参加した動機は主に 2 つある。1 つ目は、知識や視野を広げたいという思いだ。最近の日本では「多様性」という言葉を耳にする機会が増えたが、アメリカでは、その多様性を社会や企業にうまく取り入れられていると耳にした。さらに、Waymo の自動運転をはじめとする世界の最先端技術が集まっており、それらを直接肌で感じたいと思ったからだ。2 つ目は、行動力を磨きたいという思いからだ。私はこれまで周囲の状況を見てから動くことが多く、自分から率先して行動することがなかった。今回の研修でも友人と一緒になければ参加を決断できなかったと思う。そこで今回の研修を通して、自らの意思で行動する力、すなわち積極的にチャレンジする「アグレッシブさ」を身につけたいと思い、参加することに決めた。

### 2. 現地での学び

#### 1) 日本とアメリカの違い

今回、ウェスタンデジタルで働く高橋さんにお話を伺い、アメリカでの働き方や生活について知ることができた。アメリカでは、無駄な会議や業務外の活動は少なく、それぞれが自分の業務に集中できる環境が整っているとのことだった。また、休暇の調整がしやすく、成果が評価や給与に直結するなど、自由度が高い一方で責任も大きい働き方をされていると伺った。さらに、職場では年齢や性別、人種、宗教といった業務に関係のない要素が評価に影響することはなく、あくまで成果や能力によって判断されるという点が印象的だった。この話を通じて、アメリカでは「自分の役割に責任を持つ」という意識が強く、個人の成果や専門性が尊重される職場文化が根付いていることを学んだ。また、多様なバックグラウンドを持つ人々がお互いを尊重し合うことで、個人が自由に力を発揮できる環境が形成されていると感じた。私自身が特に心に残ったのは、アメリカの人々は年齢に関係なく誰にでも「リスペクト」を持って接している点である。日本では年齢や立場によって上下関係を強く意識することが多いのに対し、アメリカでは互いを対等に扱う姿勢が当たり前となっていた。その結果、差別が起こりにくく、多様性が自然に受け入れられているのだと思った。私も社会に出て働く際には、この「相手を尊重する姿勢」を大切にしていきたいと考えている。

#### 2) 人との出会い

今回の研修では、人との出会いを通じて大きな学びを得ることができた。スタンフォード大学でアンケートを取っているときに話した学生とは、初めての英語

でのアンケートということもありとても緊張していた。しかし、そのスタンフォード学生はとても優しく、つたない英語でも理解しようと努めてくれた。さらに、少し日本語を勉強していたらしく、日本語を使って会話してくれたことが嬉しかった。その学生は日本の折り紙が好きだと話し、文化の魅力が国境を越えて伝わっていることに気づけた。また、友人にもアンケートを取ってあげると言ってくれるほど親切で、相手の思いやりの深さに感動した。また、電車で迷っていたときには、現地の方が私たちに声をかけてくれ、目的地までの行き方を親切に教えてくれた。その際、日本人であることを伝え、「日本は四季があって羨ましい」と会話を広げてくれ、異国の地で温かく接してくれることに心が和んだ。これらの経験から、人との出会いが持つ力を強く感じた。異国の地で優しさに触れることで大きな安心感を得られ、また自分も同じように誰かに寄り添える存在でありたいと思った。さらに、折り紙や四季といった日本の文化を通じて自然に会話が広がり、国を越えて人とつながることができる喜びを実感した。これからは日本においても、もっと積極的に人と関わり、交流を大切にしていきたいと考えた。



図1 スタンフォード大学で  
アンケートに答えてくれた学生



図2 ウェスタンデジタルの高橋さん

### 3. 現地での気づき

これまでの私は、日本で安定した生活を送り、特に英語を使う必要もないと思いながら過ごしてきた。そのため英語の勉強にはほとんど力を入れておらず、むしろ避けてきた。海外の人との交流も積極的ではなく、アルバイト先でのトレーニングジムで外国の方と接する機会があっても、見た目などで決めつけてしまい、距離を置いて避けていた。また、インターネット上の偏った情報をそのまま信じてしまい、外国の人に対して悪いイメージを抱き、話しかけることすら怖いと感じていた。しかし、シリコンバレーに来てその考えは大きく変わった。「実際に話してみなければわからない」ということに尽きると思う。勇気を出して話しかけてみると、相手はしっかり耳を傾けてくれ、人種や民族が異なっても、親身になって寄り

添ってくれることを知った。これからは、偏見を持って距離を置くのではなく、まず一度話してみることを大切にしたいと思った。プロアクティブにいき、積極的に多くの人とコミュニケーションを取ろうと決心した。

#### 4. まとめ

シリコンバレー研修を通じて、最先端の技術や現地で働く方の考え方に触れ、人との出会いから多様性やリスペクトの大切さを学んだ。英語や行動に対する不安も、実際に挑戦することで大きく変わり、積極的に人と関わる姿勢を身につけることができた。これからは、何事もプロアクティブに挑戦し、社会人生活でも自ら行動し成長していける人になると心に気めた。



図3 ゴールデンゲートブリッジ



図4 Waymo に乗る瞬間

#### 5. 最後に

今回のシリコンバレー研修を通して、本当にたくさんの方々に支えていただきました。シリコンバレーで多くの気づきをくださったヒロさんをはじめ B-Bridge の皆様、大学職員の皆様、そして企業の皆様には心から感謝しています。また、一緒に挑戦して刺激し合えた学部生のみんながいたからこそ、楽しく充実した研修になりました。本当にありがとうございました。

## 2025 年公立小松大学産官学合同シリコンバレー研修報告書

公立小松大学生産システム科学部生産システム科学科 4 年 川辺景仁

### はじめに

私がシリコンバレー研修に参加を決めた理由は三点ある。一点目に海外を経験したかったためである。理由として私はこれまでの人生で海外に行ったことはなかったため、アメリカと日本の文化の違いや日本語が通じない環境の中で現地の方々との交流、シリコンバレーと呼ばれる世界中の巨大テック企業や最先端技術が集まる地域がどのような場所かを体験したかったためである。二つ目に私は来年に就職活動が控えており不安を抱えていたためだ。昨今、AI を筆頭に情報技術の発展が目覚ましく世の中の一部業務が AI 等に代替されており、将来私が選択した職種もなくなるのではないかと考えたためだ。

### 研修の目標

今回の研修での個人的な目標は AI が世の中の様々な職種を奪う脅威となるのかを判断することであった。私自身は AI を人の仕事を奪う大きな脅威になると思っていた。ChatGPT を例に挙げると発表された当初は回答が不正確であったり、明らかな誤答を出力していたりしていたしかし、今となっては文章の入力のみでのプログラムの作成や推論を行い専門知識にも対応をしている。この時私は上記に記したように不安を感じていた。そこでシリコンバレーという世界的テック企業が集まり情報技術の発展の中心となっている場で現地やその付近で暮らしている人々は AI を脅威として見ているのかどうかを知りたいと考えていた。また私は英語があまり堪能ではないが英語で会話をしてみたいと考えていた。

### 研修での活動

研修はグループ活動で災害と仕事の二つのテーマでアンケート調査をすることにした。研修の中で Google Visitor Center に行く機会があったので Google の社員の方々にアンケートを答えていただこうと思い自分の英語力に不安を持ちながら話を掛けに行った。しかし英語でのコミュニケーションが困難なうえ、「今は時間がない」や「忙しい」と言われ断られてしまった。初めの挑戦が上手くいかず調査が上手くいくのか英語力の不安も合わさって怖くなってしまった。このままではいけないと思いアンケートの内容が長いため答えるのに躊躇されたのではないかと考え、質問の内容を数個に減らして次の挑戦をしようと考えた。別の日にスタンフォードの見学があったのでそこでアンケートを取ることにした。スタンフォードでは質問の数を減らしたことが功をそうしたのかアンケートに回答してもらうことが出来た。

日程の中にサンフランシスコ近辺を自由行動する日があった。サンフランシスコでは Waymo が提供する自動運転タクシーサービスがあった。Waymo のアプリから配車と目的

地を設定して乗ることが出来た。Waymo に搭乗して感じたことは運転が上手い人の運転技術と遜色がなかったことである。車線変更や右左折はもちろん、狭い道での徐行と停止といった運転する際の注意点に気を付けていた。自動運転は限定地域だけであるが実用段階にあると感じ、法や有人運転のタクシー業界の雇用といった問題があるが近い将来様々な国でサービスが正式に展開されていくであろうと確信した。

シリコンバレーの DoorDash と HelloSake で働く原健太さんにお話をお聞きする機会があり、私が持つ就職に関する質問をした。原さんは AI がプログラムを書くことが出来るようになって仕事では自分に五人分の部下がいるような状態になり、それ以前と比べて作業効率が五倍ほどになったとおっしゃられていた。そのように AI を使いこなすにはシニアレベルの AI に関する知識や経験が十全にないと難しいため、今のシリコンバレーはジュニアレベルの開発者はレイオフされていると言われた。ただし AI はプログラムを書くことが出来るが本当に正しいコードなのかどうかは結局人が確認する必要がある、つまりところ AI はツールでしかなく扱うためには AI に詳しくなるしかないのだと感じた。

最後に

私のシリコンバレーでの最初の驚きは買い物に行くために道路を渡る際横断歩道の信号の色が赤と白であり白が日本の青であり気づくまでは青になるのをずっと待っていた。この時点から日本とアメリカでは文化が違うのだと感じわくわくした。また英語で会話するとき基本は通じず身振り手振りやスマホの翻訳機能を用いて、何とか意思が伝わった時達成感を感じ英語で会話するということは自分が思っていた以上に楽しく日本でも機会がある時に英語を使いたいと思った。

本研修は渡航前に持っていた疑問の解消や新たな自分の発見、今後の課題を見つけることができた充実した研修だった、これらの経験を将来に生かしていきたいと思う。



図1 Waymo の車内



図2 Google visitor Center

## 2025 年シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部 生産システム科学科 綱崎陸翔

### この研修に参加した動機

今回私がシリコンバレー研修に参加した理由は、自分の可能性や知見を広げるためである。初めて海外に行けることに加え、起業家精神を学び、現地で働く方々から直接話を伺える機会がある。将来、起業や海外での挑戦を視野に入れている私にとって、参加しない理由はなかった。実際、大学2年の頃から参加を希望していたが、定員や就職活動の関係で、念願の参加は大学4年での実現となった。

### 活動内容

今回の研修では「AI との共存」というテーマで活動を行った。主な活動内容は二つである。

一つ目は、LinkedIn や Facebook を活用してアポイントを取り、現地の方から話を伺うことだ。幸運にも、NVIDIA に勤務する日本人の方から直接お話を伺うことができ、AI との向き合い方を改めて考えるきっかけとなった。

二つ目は、「AI×就職活動」というテーマでシリコンバレー現地の人々にアンケートを実施したことである。これら二つの活動から得た学びを最終的にまとめ、発表を行った。

### 研修の中で挑戦したこと

今回の研修で最も挑戦したことは、「恥じらいや不安を押し殺して積極的に行動すること」である。

日本にいる段階から SNS を通じてアポイント獲得に挑戦したが、何通送っても返信がなく、海外でのアポ取りは難しいのではと諦めかけたこともあった。しかし、粘り強く送り続けた結果、実際にアポを取ることができ、「継続することの大切さ」を学んだ。

現地では、ユニオンスクエアやスタンフォード大学などで、幅広い年齢層の人々に男女問わず話しかけてインタビューを行った。当初は緊張や英語力への不安から、思うように言葉が出てこなかった。しかし、スタンフォード大学で初めてインタビューに応じてくれた方が、私の拙い英語を一生懸命聞き取ろうとしてくれたことで、コミュニケーションの楽しさを再確認することができた。

また、日本とアメリカのコミュニケーションの大きな違いとして、道行く人やタクシー運転手、レジの人まで「挨拶と一言の会話」を交わす文化があることに驚いた。

“How are you?” “I’m good. How about you?” といったやりとりが日常的に行われており、まさに「郷に入っては郷に従え」で、自分から積極的に声をかけるよう努めた。無視されることや怖い思いをすることもあったが、自分の殻を破る大きなきっかけになった。



### 学んだこと

今回の研修では、現地の方々やシリコンバレーで働く日本人の方から多くの話を伺うことができた。その中で特に印象的だったのは、「失敗を失敗と捉えず、成功への過程と考える姿勢」である。

また、シリコンバレーで働く日本人の方々に共通していたのは、「好きなことを極めた結果、それが仕事につながり、さらに好きだからこそ深め続けられる」という点である。例えば、日本酒が好きで海外向け販売サイトを立ち上げた方や、プログラミングが好きで最先端の技術を追求するために渡米した方など、様々な人に出会った。

私は既に就職活動を終えており、「話すことが好き」という面と「理系として IT や機械系が好き」という面から IT 営業を選んだ。ただ、システムエンジニアの内定も持っており、どちらの道が正しかったのか迷うこともある。しかし今回の研修を通じて、「好きな分野で就職し、極め続けた先には必ず自分にしかできない仕事がある」と信じて努力しようと思えるようになった。そして、仮にその選択が失敗とされるものだったとしても、必ず成長の糧にするという覚悟ができた。

### まとめ

今回のシリコンバレー研修は、私にとって非常に貴重な経験であり、大きな刺激となった。当初は「就活も終わったのに参加する意味があるのか」と迷ったこともあったが、実際に参加してみて、むしろ進路が決まっているからこそ「これからどう頑張るか」を整理し、自分の選択に自信を持つことができた。

最後に、現地で出会った方々、そして共に研修に参加した仲間とのご縁は、挑戦したからこそ得られたものだと思う。今後もこうした挑戦の機会を逃さず、出会いに感謝しながら人生を楽しんでいきたい。

### 最後に

今回この研修に参加するにあたって必ず自分一人では難しかったと思う。親の援助や小松市、大学からの助成金があったからこそ参加することができた。さらに、引率して下さった先生方や Hiro さんなど今回のシリコンバレー研修にかかわってくださったすべての皆さんに感謝したい。

## 産官学合同シリコンバレー研修報告書

生産システム科学部生産システム科学科 4年 渡 美鈴

### 1. はじめに

2025年産官学合同シリコンバレー研修は8月24日から8月30日の一週間行われた。榎本特任教授による事前研修・説明会は3回行われた（対象は企業・行政を含む参加者全員）。その他、海外渡航健康講座と危機管理セミナーに参加した。参加者は4つのチームに分かれ、チーム毎に研修のテーマを決めた。そして事前研修では、研修中の行動計画や調査内容を話し合った。計画を立てていく上で、話をお伺したい方には「LinkedIn（リンクドイン）」というビジネス向けのSNSを活用して、アポ取りを試みた。ちなみに私が所属するチーム「マルゲリータ」は、アメリカの食文化をテーマに行動計画を立てた。チーム名の由来はメンバー全員が食べることが大好きで、たまたま話の流れで出てきた「マルゲリータ」がチーム名となった。

### 2. 研修に参加したきっかけ

この研修は大学一年生の頃から興味を持っていたのだが、私が研修に参加して得られるものは果たしてどれほどのものなのか、自分がこの研修に参加するに妥当な人間なのかなど、参加する意味を深く考えてしまい、なかなか決断ができずにズルズル引っ張ってしまった。このように私は少し優柔不断なところがあって、迷ってしまうことも多いのだが、だからこそ今回シリコンバレー研修に参加することに意味があると感じた。

アメリカ・カリフォルニア州のサンフランシスコ湾の南側にある地域、通称シリコンバレーは、個人旅行で行くには私の英語力の問題上難しいと思ったため、この貴重な機会を逃すのは勿体無いと強く感じた。また、この学生時代に同世代の人たちと海外研修に参加し、新たな刺激を受けられる経験に大きな価値を感じ、参加を決めた。

### 3. 活動内容

以下にチームマルゲリータとして行なった活動内容を紹介する。

#### 1) スーパー視察

新たな気づきを求めて、多様なスーパーを視察することから始めた。

“Trader Joe’s”, “Walmart”, “Hankook Supermarket”, “Mitsuwa Market place”, “Foodmaxx”, “Whole Foods Market” の合計5つのスーパーに回った。

#### 2) スタンフォード大学で聞き込み

スタンフォード大学でアンケート調査を行なった。スケッチブックに何枚かの手書きフリップを作成し、それを用いて、国籍人種男女年齢関係なく聞き込みを行なった。アンケートの質問は全部で4つ、全て日頃の買い物に関する質問だ。「1. どのくらいの頻度でスーパーマーケットに行くか」「2. 買い物するとき何を考慮していますか？」「3. 健康に気をつけて買い物していますか？」「4. どのくらいの頻度で朝食を食べていますか？」である。

#### 3) 岸本さんと面会

アメリカの日系スーパー、ミツワマーケットプレイス(Mitsuwa Market place)サンノゼ店の店長、岸本さんにアポを取り、実際にサンノゼ店のスーパー内でお話をお伺いすることができた。貴重なお話を聞くことができ、とても有意義な時間だった。

#### 4. 挑戦したこと

些細なことだが、配車サービスの Uber や Lyft を使う際、運転手の方に元気よく挨拶することを心がけ、乗車中 1 回は絶対に運転手の方に英語で話しかけるという密かな挑戦をしていた。運転手の方達は皆快く対応して下さり、英語で話しかけることに緊張していた私は、少しずつ自信をつけることができた。

#### 5. 学びや気づき

多様な人がいる環境、シリコンバレーではどういうマインドが大事なのかという部分にフォーカスし、また研修中いろんなことを吸収しようと常にアンテナを張ることを意識した。マインドの面では、以下の五つの点が重要だと考えた。

- スピード感：とにかく試してみる、完璧を目指すより、まず形にして動かす
- 失敗を恐れない：とにかく失敗を恐れない、うまく行かなくても次に活かせば OK
- 自由でフラットな関係：年齢や肩書きより「アイデアが面白いか」で評価される
- 世界規模で考える：最初から「世界中の人に使ってもらう」ことを意識

そして、グローバルな人材となるには、皆が自分の意見を進んで発言する、自分の存在を SNS など活用して周りに知ってもらう、その姿勢がまず大切だと感じた。

#### 6. 最後に

今回、チームマルゲリータは食をテーマに数々のスーパーに訪れた。そこで感じたアメリカスーパーの良い点と日本スーパーの良い点を掛け合わせたスーパーを小松に作るのはいかがでしょうか考えた。アメリカスーパーの良い点は、同じ用途の商品でもたくさんの種類があること、店員同士とても仲が良い、パンのスライスカットが自分でできる（機械が常備設置されている）、オリジナルグッズで店名のアピールができる（ショッピングバッグなど）、色鮮やかで見ていて楽しい商品や陳列の仕方、ことが挙げられた。対して、日本スーパーの良い点は、サイズ感がちょうどいい、おつとめ品コーナーがある、リサイクルステーションがあるという点である。

今回アメリカスーパーで何かハイテク技術が使われていたら知りたい、日本スーパーとの違いを感じたい、そういう思いで調査を行なった。ハイテク技術は正直見つけられなかったが、自分の目や肌で感じたアメリカスーパーはイメージしていたものよりもずっと魅力的だったことがわかった。

写真 1 は、スーパーで見かけた定期的に商品である野菜に水を撒く様子。

写真 2 は、1 日フリープランで訪れたアルカトラズ島で撮った写真である。



写真 1 野菜に水を撒く様子



写真 2 アルカトラズ島

## 成長のきっかけ

公立小松大学 国際文化交流部 国際文化交流学科 三年 是国貴斗

### はじめに

三年の初めに、研修に共に参加した久生くんから、シリコンバレー研修の誘いを受け、入学当初から大学生活で海外に行ってみたいという気持ちがあったので、いい機会だと思い、参加しようという意思が固まった。

事前研修を受けるにつれて、シリコンバレー研修ではどんなことが経験できるか楽しみな気持ちと、同時に現地で英語を使って会話ができるか、しっかりと得るものを得て帰ってこれるかなどたくさんの不安な気持ちが募った。そんな不安にまみれた本研修で僕は、成長のきっかけになる経験をすることができた。

### 研修を通して、感じたこと

出発当日、前日に寝られなかったのもあり、あっというまに飛行機の時間が過ぎた。現地に行ってみず街並みの違いや食の違いにおどろいた。日本では見ることのできない景色や食べ物で、海外に来た実感が湧いた。

翌日、ひろさんや、原さんからのレクチャーがあり、日本とは働き方や規模など全く違い、「失敗は恥じゃなくて挑戦の証」、「日本ではもう働きたくないかな」みたいな話や「シリコンバレーでは、日本では10人でする仕事を一人でこなせる」という話を聴いて、「本当にそんな感じなのかな一大げさでしょ」と最初は疑ってしまった。

翌日、班活動を通してスタンフォードの学生にアンケートを取った。失敗について聞いたときに、「失敗は悪い事じゃないし、挑戦することが大事だよ」と言っていた。

彼女は、僕たちが日本人だと分かったと、独学で勉強した日本語を話してくれてより会話が広がったことで、お互いの意見を交えられる良い交流をすることができた。いま思えば、あの場面でも挑戦する事の大切さを感じることができていたのだなと振り返ることができた。

アポイントを取ることができた、サンフランシスコで働く高橋さんから、まさに前日に聞いたような仕事の効率性の良さの話や、シリコンバレーでの働き方でなれると、日本にはもう戻りたくないという話を聞くことが出来た。最終日にも様々な環境で働く日本人の方や、アジア国籍の方から働き方についての話を聞き、日本とは全く違う環境でみんな働いているのだなと感じ、その働き方に興味を持つことが出来た。

班活動含め、班以外でも、普段関わることのなかった仲間とうまくやっていけるのかという不安が大きかった、けれど五日間を過ごす中で、その不安はいつのまにか消えていっ

た。グループワークやディスカッションを繰り返すうちに、みんなが互いを知ろうと積極的に関わっていく姿勢に触れて、むしろ憧れのような気持ちが芽生えたからだ。

今回の研修で出会った仲間には、さまざまな強みを持つ人がいた。場をまとめられる人、全体を俯瞰して意見を整理できる人、堂々と大きな声で発言できる人。それぞれの役割が噛み合い、それぞれのチームが形になっている様は、とても刺激的だった。一人では到底たどり着けない発想や成果が、みんなといるからこそ生まれていく。その瞬間に立ち会えたことも、この研修の大きな価値となったと思う。



スタンフォード大学の Lela さん



シリコンバレーで働く高橋さん

## これから

現地で働く人たちから「挑戦を恐れない姿勢」そして仲間たちから、「挑戦実践することの重要性」を学び、それぞれの多様な強みに触れることが出来た。シリコンバレーの環境と仲間たち、両方から受けた刺激が、自分の中で一つの気づきにつながった。

しかし僕は、留学中に挑戦の姿勢を前面にだすことが出来なかった。自分もこうなりたいと感じながらも、行動に移せなかった。

楽しかったシリコンバレーでの思い出と、やりきれなかったもどかしさで、複雑な気持ちのまま、帰国することになった。でも今は、その悔しさを昇華して、前向きな危機感へと変えられている。

シリコンバレーで多様な人たちから知ることができた働き方や文化の日本との大きな違い、仲間の姿に教えられた挑戦の大切さ、それによって得ることのできた危機感。すべてを日本に持ってかえて来ることができた。

僕はこれから、日本とは全く違う働き方を知った上で、日本でどのように働いていくのか、はたまた日本から飛び立ち、新しい働き方の中で生きていくのか、それはまだ分からない。だが、どのような環境に置かれても、常に挑戦し続けるということを心掛けて生きていきたい。まずは残りの大学生活、短い期間ではあるけど、挑戦をし続け、次のステージへの土台を作っていきたい。僕は、いままでの自分の殻を破っていけるような、そんな挑戦をし続ける。

## 「非常識と常識が生み出す自信と情熱」

3年 久生獅十

私にとって、このシリコンバレー研修で経験したこと、多くの人に出会えたことすべてにおいて特別で素晴らしい時間だった。私は過去に何度も海外経験をしてきたが、その時に感じられなかったことや、今だからこそ感じられた価値観に出会えたことに感謝したいと思っている。その思いをここに示していく。

### 「活動履歴について」

#### 【1日目】

8月24日

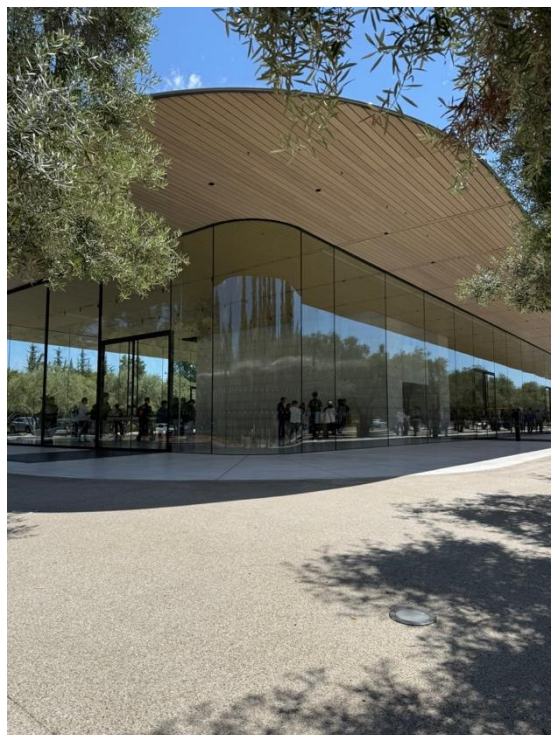
宿泊先のホテルまで、ヒロさんとミワさんに迎えにきていただき、無事にホテルに到着。ホテルの会議室で参加者の自己紹介を行い、軽いオリエンテーションを受けて自由時間を過ごした。今回の研修の出会いに感謝しコミュニティを大事にしたいと感じ、小松大生の男子組数名でサニーベルにある、地元でも人気のピザレストランで夕食を取り、次の日に備えて就寝。今回の研修の一番の重要キーワード「Proactive」を想像する良い時間になった。



#### 【2日目】

8月25日

アメリカで初の朝ごはんを食べて、留学していた時の感覚をものすごく思い出す。朝食後はヒロさんからシリコンバレーについてと、シリコンバレーの素晴らしさ、日本との環境の違いや、世界に革命を起こす人材はどういった行動をしているのかを丁寧に教えていただきました。11時頃からは、シリコンバレーの有名企業に勤めながら、シリコンバレーに家業の日本酒を展開している、原健太さんのレクチャーを聞く。ここで学ばせていただいた感覚に感銘を受け、ランチタイムの時間を全て削り一人で原さんと居残りで会話させていただきました。すごく良い時間でした。午後からは、Apple と Google に訪問し、有名企業の原点を感じることができた。私たちのチームのアンケートを実施し、現地の凄さや厳しさを感じる時間だった。個人としては、会話の力が前回の留学から格段に上がっていることが確信できる充実した時間だった。その後ホテルに帰り最終プレゼンに向けてチームで計画を立てた。



### 【3日目】

8月26日

午前中にスタンフォード大学内をしばらく視察し、スタンフォード大学の中で昼食も取った。食堂内にいる多くの学生に話しかけ、Proactive に行動することができたと思う。大学内でチーム課題のアンケートについても調査することができた。スタンフォード大学の学生やスタッフの人は本当にフレンドリーでコミュニケーションの重要な感覚を学ぶことができた。午後からは INTEL に行き、近くにあった 49ers のスタジアムにも行った。その後に、アポイントメントを事前にとっていた、三育学院サンタクララ校に行き、アメリカの学校や日本語補習学校の状況を見学した。夕食はホテル付近の公園で全員で、BBQ をし

た。シリコンバレーでずっとインプットしてきた時間が多かったが、ミワさんやヒロさん、福島高専のみんなにアウトプットする時間を自分で作って、みんなに自分を感覚を話すことができ良い経験になった。



#### 【4日目】

8月27日

この日はチームでサンフランシスコ市街地の中を観光した。サニーベールの駅からカルトレインでサンフランシスコ駅まで行った。駅から化学アカデミーまで無人全自動運転タクシーの waymo に初めて乗り、世界の最先端にいる感覚になった。AI 技術の発展が日本の何倍もあることを実感し、人々がその環境にコミットしていることにも、環境や地域の差を感じることができた。化学アカデミーで2時間程過ごし、フィッシャーマンズ・ワーフに行きレストランで食事を取ったり、現地を満喫することができた。JAPAN タウンやユニオンズスクエアに行った後、アメリカの一番人気なハンバーガーを食べようということで、In-n-out で食事をし、ホテルで翌日のプレゼンの会議をした。

#### 【5日目】

8月28日

プレゼンの準備を早朝から行い、午後に向け作戦を練る。午後からは、プレゼンを行い、

その後には懇親会を行なった。懇親会のピザをアメリカのコストコにミワさんとヒロさんに自分もついていきたいとお願いし、3人で今回の経験やもう一度海外に長期間滞在することをアウトプットした。懇親会にはシリコンバレーで活躍する有名企業の人に多くきていただき、すごく刺激を受ける時間だった。



### ◎今回の研修で身につけたこと

私はまだ小さな世界で生きている。これは今回の研修で一番感じたことだ。このシリコンバレー研修で、シリコンバレーのトップ企業で活躍している人や、シリコンバレーエリアに新しい風を吹かせるために活動している人たちの意見を聞いてそのように感じた。具体的に自分にインプットした重要な思考は、非常識と常識についてだ。研修前は、何か取り組む時に常にマイナスな思考や周りの意見、承認欲求が勝つことが多く行動する時にはいつも不安で自信がなかった。しかし、自分の世界観（常識）をむき出しにして、その世界に自分から周りの人たちを巻き込んでいかなければいけないということを学んだ。確かに、聞こえ方は良くないが、挑戦する上では最も重要なことだと感じた。シリコンバレーでは、そのような環境が整っていたように感じた。自分の枠で常識は決められなくて、多様な人たちが生活している。それぞれ国籍も違えば、育った環境も異なっていて、一人一

人常識が違っているのにお互いを尊重していて、最高のコミュニティ環境だと感じた。何故だと考えた時に私が辿り着いた意見は、多様な人が自分の世界にお互いに巻き込んでいるからこそ、互いに色々な価値観を感じていて、経験して、自分が非常識だと感じていたことが常識に変わり、世界が広がっていく環境がシリコンバレーには根本的に存在しているということだ。このような環境で活躍している人の根本にあるものを聞く機会があり、感銘を受けた。情熱、ファウンダーマーケットフィット（自分だけが簡単にできることは何か、自分だけが知っていることは何か、誰もがやりたくないことは何か）、自分が希少な存在（いかに自分にしかできないことを考える）という思考を常に持つておくことが、自分の自信や行動になってくるということを学んだ。Appleの職場環境はまさしくその環境に近いものだと感じた。世界でトップ中のトップの人材はこの価値観が既に持っているようにしか見えなかった。この価値観は多文化理解や多国籍交流など世界で大切にされていることにも関係していると感じ、私が生きていく上で大切にしていこうと思っている。私たちの日常で利用するツールやアプリの企業はほとんどシリコンバレーに存在している。そのシリコンバレーで活躍している人たちを実際に見て、「この人たちが世界を作っているんだな」と真っ先に感じた。大変であることは間違いないが、多様な視点や人材で溢れている環境で過ごせた時間が私の人生の一つの大きな武器になったと思う。そして、What じゃなくて Do で捉えることを意識し常にアンテナを張って行動しようと決めた。自分がしないといけないこと、したいことを本気になって感じて、情熱を本気で注げるものを見つけることが今自分に一番できることだと感じている。朝起きたらまずしたい、飯よりもこれというものを見つけて、時間を忘れるくらい夢中になれるものを感じる。ビックピクチャーの流れを超えられるのは、情熱しかないと思う。最後に、私がシリコンバレーで学んだ一番の考えを述べる。物事や自分の進展や発達を考える時に、ボーリングピンの真ん中を考えるとということ。この感覚を言葉にするのは、少し難しいので、自分はこの感覚をこれからの自分の行動で示していきたいと思っている。本当にこのシリコンバレー研修では言葉にはできない程の感覚を身につけることができたので、今後の人生の歩み方を大きく変えられるきっかけになった。

## シリコンバレー研修報告書

保健医療学部 看護学科一年 谷内穂ノ佳

### 1. 研修参加の動機

私は、「自分を変えたい」「もっと素敵な自分になりたい」という思いからこの研修に参加しました。

公立小松大学に入学して早々に行われた入学オリエンテーションにて、鈴木郁人先生がこの研修について紹介してくれました。もともと留学に興味があった私は、研修の説明会に迷わず参加しました。

そこで初めてお会いしたヒロさんこと、榎本博之さんのお話を聞いて、私は大きく心を動かされました。もっとこの人と話がしたい、この人が話す世界を見てみたい。なにより、「自分を変えたい人ほどこの研修に参加してほしい」というヒロさんの言葉で、私はこの研修に参加することを決めました。

### 2. 現地での学び

私は、この研修に参加するにあたって、自分の好きなこと、伝えたいことを大切にしようとして「看護の人間」ではなく「ダンスが好きな人間」として参加者の皆さんとコミュニケーションしていきました。

私は、大学内のサークル活動でダンスサークルに所属しています。時間が許す限り踊っていたいほどダンスが大好きな人間です。この研修を心の底から楽しみ、自分の成長につなげるためにも私の大好きな「ダンス」と一緒になら頑張れると感じたからです。

しかし、現地の人々とコミュニケーションをとることも目的としたプロアクティブな研修なのに、私は一向に勇気が出ず話しかけることができませんでした。自分の英語力のなさを認めるのが怖かったんです。それと、私の中で完璧な完全なる答えを出そうとしていたところが多々あり、なかなか話しかけられずに過ごしていました。

そんななかで、グループ行動もあるこの研修で「話しかけられない」とグループの人に相談したところ「そんなに行き詰まらなくていい」「一年生でこの経験は大きい。」そんなふうに慰めてくれました。そして、「行き詰ってじぶんをだめだと責めないでほしい。個性があるのは強い」とも言ってくれました。確かに、アメリカのスーパーに行くと、もうやってしまえ感満載な食べ物や商品が売られていたのを覚えています。

その励ましのおかげで、私は最終日に同じホテルに宿泊していた日本が好きな親子と交流することができました。一緒にいたお子さんは、私とたくさん遊んでくれました。お母さんは日本が大好きで、少しだけ日本語を話すことができました。帰る時も、足にしがみついてくれてとてもかわいかったのを覚えています。

この旅で、私はコミュニケーションの大切さを知りました。今まで自己完結型だったのですが、わからないところはすぐに聞いたほうが、効率がよく、新たな視点でものを磨くことができるとわかりました。

現地の人からは、いい意味で人のことを気にしていない環境の素晴らしさを感じました。サンフランシスコのベイエリアにある、フィッシャーマンズワーフに行った時、そこにいる人が来ている服、髪の色、何を売っているか、なにをやっているか、どれをとってもみんなそれぞれちがいました。食事している人もいれば、踊っている人もいたし、カップルで仲良く笑い合っている姿もありました。

誰も気にしていませんでした。みんな笑顔でした。素敵なおとこだと心の底から思いました。

きっと、私がここで踊り出しても誰も気にしないんだろうなと思うと、なんて生きやすい環境なんだと胸が躍りました。周りの目が気になってうまく自己表現できない日本。今の日本が成長できないのは、足りない部分はこれだと強く感じました。

### **3. シリコンバレー研修を終えて**

この研修を終えて、私は人と人がつながることの大切さ、根底にあるコミュニケーションの大切さを学びました。そして、日本に帰ってきた今、考えて動けなかった自分を卒業しました。「やる」という行動が一番大切だと理解し、今は大好きなダンスの動画を毎日上げています。

シリコンバレーで得た知見やつながりをこれからも大切にしていきます。



↑ 現地で仲良くなった子



↑ やっちゃんえ精神満載なケーキ

## 産官学合同シリコンバレー研修報告 ～シリコンバレー研修を通じて得た気づきと今後への展望～

ライオンパワー株式会社  
総務課 浅井 朋美

### ◆はじめに

このたび、産官学連携による公立大学主催のシリコンバレー研修に、企業の採用担当者として参加させていただきました。学生の皆さんと共に現地を訪れ、最先端の技術や文化に触れる中で、私自身も多くの学びと気づきを得ることができました。

本報告では、企業人としての視点から、現地で感じたこと、考えたこと、そして今後の人材育成や地域づくりへの展望についてお伝えします。

### ◆ダイバーシティは「語るもの」ではなく「そこにあるもの」

研修に参加する前は、「ダイバーシティの取り組みを学びたい」と考えていました。ところが、シリコンバレーではそれが“取り組み”というより、“前提”として自然に根付いていることに驚かされました。

現地の企業では、国籍や文化の違いを意識することなく、多様な人々が当たり前のように協働しています。Western Digital の社員の方が語っていた「人のバックグラウンドではなく、その人自身を見る」という言葉には、採用担当者としての考え方が大きく揺さぶられました。

日本では、学歴やスキル、所属など“外側”の情報に目が向きがちですが、これからは“その人が何を考え、どう動いているか”にもっと注目すべきだと感じました。ダイバーシティは制度や枠組みではなく、日常の中に自然に存在するもの。その土壌が企業の成長を支えているのだと実感しました。

### ◆シリコンバレーの経済構造と働き方の背景

シリコンバレーは、単なる技術の集積地ではなく、革新が連鎖する「経済の仕組み」そのものが存在している場所でした。スタートアップが次々と生まれ、成功した起業家や投資家が次の挑戦者に資金を託すことで、挑戦と成長の



サイクルが止まることなく続いています。

資金調達の規模は桁違いで、株式報酬によって億万長者が生まれることも珍しくありません。

この仕組みの背景には、「成果主義」と「自己責任」の文化があります。アメリカでは、個人の成果が正当に評価され、それが報酬にも直結します。雇用形態も「at-will 契約」が主流で、雇用主も従業員も自



由に契約を終了できる仕組みです。一見すると冷たく感じるかもしれませんが、実際には「信頼」がベースにあり、責任の所在が明確だからこそ、迅速な意思決定が可能になっているのだと感じました。

一方、日本では「安定」や「協調」が重視され、雇用関係も長期的な信頼構築が前提です。稟議文化に象徴されるように、意思決定には時間がかかり、責任の所在が曖昧なまま進むことも少なくありません。こうした違いが、ベンチャーが生まれる土壌の差につながっているのではないかと考えさせられました。

#### ◆「思い込み」が挑戦を妨げる

研修中、私は「学生が主役だから、企業人は控えめに」という思い込みを持っていました。しかし、それこそが自分の行動を制限していたことに気づきました。年齢や立場に関係なく、積極的に関わることで得られる学びは大きい。現地での経験を通じて、「変化は誰かが起こすものではなく、自分から始めるもの」という意識が芽生えました。



この気づきは、ダイバーシティの本質にも通じます。多様性の問題も、実は「思い込み」によって生まれているのではないかと。本音で対話し、相手の背景ではなく“今ここにいるその人”と向き合うことが、真の理解と協働につながると感じました。

#### ◆プロアクティブに動くことの価値

事前研修では「プロアクティブに行動すること」が強調されていました。現地でのアポイントメント取得や人とのつながりを通じて、学びを深める姿勢が求められました。私は年齢や立場を理由に一步踏み出すことを躊躇していましたが、実際に行動してみると、そこには新しい世界が広がっていました。

「周囲の理解を得るのは難しい」「自分がいなければ迷惑がかかる」といった思い込みを乗り越え、「やりようによっては新しい価値を生み出せるかもしれない」という気持ちに変わりました。この変化こそが、今回の研修で得た最大の成果です。



#### ◆今後への展望：採用と地域づくり

採用担当者として、今後は「その人自身を見る」姿勢を大切にしたい。学歴やスキルだけでなく、個人の価値観や行動に注目することで、多様で柔軟な組織づくりが可能になる。また、自分自身の人間力を高める努力を続け、変化を恐れず挑戦する姿勢を持ち続けたい。

研修チームのテーマである「小松市にシリコンバレーを創る」という構想にも強く共感しました。その実現には、ダイバーシティとグローバルな思考を育む教育、そして起業できる土壌の整備が不可欠です。シリコンバレーに行かなくても、地域で挑戦できる環境を整えることが最終目標です。

#### ◆感謝とこれから

今回の研修に参加した学生の皆さんには、日本の未来を担う可能性を強く感じました。若さは挑戦への一歩を軽くする力があり、「思い込み」の少なさは柔軟な発想を生みます。ぜひ、今後も積極的にチャレンジし続けてください。そして、今回の研修に参加したことに心から敬意を表します。

この研修は「行って終わり」ではありません。得た気づきをどう活かすかが問われています。私自身も、今回の経験を通じて「無意識にプロアクティブに行動できる自分」へと成長していきたいと思います。

最後に、このような貴重な機会をいただき、心から感謝しています。学生の皆さんと一緒に学び、考え、刺激を受けた時間は、私にとっても大きな財産になりました。ありがとうございました。



# シリコンバレー研修 報告書

株式会社日本オープンシステムズ 中川 裕将

## 1 シリコンバレー研修に参加した経緯

今回のシリコンバレー研修には、弊社から特別に参加の機会をいただき、参加させていただいた。ただ単に参加するだけでは、せっかくの機会を十分に活かせないと考え、研修に臨むにあたり、自分なりに以下の3つのテーマを掲げた。

1. ITの最新技術に触れる
2. 新たなコミュニティに積極的に飛び込む
3. コミュニケーションを積極的にとる

以上のテーマを意識しながら研修に取り組み、学びを最大限に活かすことを目指した。

## 2 研修事前準備について

今回のシリコンバレー研修では、Hiroさん（B-Bridge 榎本博之さん）より「Proactive」に行動することの重要性を強調していただいた。事前準備の段階から、学生と密に連絡を取り合い、シリコンバレーの土地柄やカルチャー、バックグラウンドについて調べるよう心がけた。特に私たちのグループは最終発表のために多文化について深く学ぶことに決めた。これにより、研修当日の学びをより深める基盤を整えることができた。

## 3 研修内容

研修ではたくさんの貴重な体験をしたが、特に印象に残っていることを記す。

### 3-1 学生との交流

多くの学生が、自分の学びたいことや体験したいこと、気になることなどを積極的に伝えてくれて驚いた。自分の学生時代を振り返っても、ここまで積極的に相手に開示することとはなかったため、当初は抵抗を感じる場面もあった。しかし、早い段階でコミュニケーションに慣れることができた。また、研修期間内に参加したほとんどの学生と交流することができ、あらゆる物事に対する新たな視点を多く得ることができた。

### 3-2 原 健太さんの講演

講演のなかでも、「好き」を仕事につなげるだけでなく、自分の生き立ち、経験等のバックグラウンドを組み合わせ、自分だけが世界にアプローチできることを見つけて仕事にしておられる姿に感心した。「ビクピクチャーをとらえる」といった世の中の流れや自分が何に依存して生活しているかを分析することが重要というお話を聞き、自分だけの強みは何か、自分は逆に何が得意ではないのか等の自己分析をしっかりと行っただけで、世の中には何が足りていないのか等を感じ取る「アンテナ」を常に張り巡らせて生活を送る重要性に気づいた。ほかにも海外で働くメリットやデメリットについて語っていただいた。特に日本との違いを感じたのが「レイオフ」で、お話を聞く前は、急に解雇されることがあり常に不安を感じそうなシステムだと考えていたが、このおかげで、常に技術力の向上を目指そうするメンバーが残るため、質の高い取り組みができるのではないかと感じた。

### 3-3 フィールドワーク

スタンフォード大学でのフィールドワークでは、学生に話しかけることでアンケート等に回答していただくことができた。そのアンケートや会話で、多様性について私は大きな勘違いをしていることに気づいた。具体的には多様性に対する意識が現地の人達にとっては薄いことが分かった。現地の人たちにとっては多様であることは生まれてから当たり前であり、互いに文化的違いや、人種の違い等による配慮は無意識レベルで行われていたことである。特に日本は単一民族で大部分が構成されているため、まだ多様であるとは到底言えない状況である。シリコンバレーのように多様な人々の意見を取り入れるようなビジネスを日本で実現するためにはまずは多様性に対する意識の改革から行う必要があると感じました。

### 4 まとめ

他にも多くの発見があったが、まずは海外に対する意識が大きく変わるきっかけになったと感じた。自分とは異なる言語を話す人々が数多くいる土地で、自分の意志が果たして伝わるのか、また相手は自分をどのように見ているのかといった不安は少なくなかった。しかし、実際に自分から話しかけたり、相手に話しかけてもらったりする中で、言語だけでなくジェスチャーや表情といった非言語的な手段でも十分に意思疎通ができることに気づいた。その経験は「伝える」ことへの自信につながり、同時に、言葉の壁を越えた人と人とのつながりの可能性を強く実感するものとなった。また、意識して「Proactive」に活動することで、気づきや学びの多さを改めて実感し、今回の研修は非常に有意義なもの

なった。受け身では得られなかったであろう経験を通じて、自分自身の成長を感じることができ、今後の学びや挑戦に対する姿勢にも大きな影響を与えてくれるものになった。



5 さいごに

最後に、このような貴重な機会をご用意くださった B-Bridge の皆様、学びを共に深めてくださった公立小松大学の皆様、そして本研修にご尽力いただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

## 産官学合同シリコンバレー研修 報告書

(株)日本オープンシステムズ 平井遥斗

### はじめに

昨年度、社内で開催された「GOOD JOBS AWARD」において優勝し、その副賞としてシリコンバレー研修に参加する機会をいただきました。

今回、このような経験の場を設けていただいたことに、心より感謝申し上げます。

### 事前研修

私は「team-mens」として、小松大学の学生3名とチームを組むことになりました。チーム課題として取り上げたテーマは「AI」です。最先端に行くシリコンバレーでは、AIがどのように活用されているのかに強い関心を持ったことが背景にあります。最終的な目標として、AIを活用した新しいサービスを提案することを掲げ、事前準備を行いました。

### 現地での研修

#### 【1日目】

現地に到着してまず感じたのは、気温が非常に快適であるということでした。日本よりも空気が澄み、心地よい気候に触れることで、自然と活力が湧き上がってくるような感覚を覚えました。こうした環境面の違いも、日本とシリコンバレーを比較する上での大きな発見であると感じました。ホテルに到着後はオリエンテーションを受け、その後、最初の買い出しに出かけました。現地のスーパーを訪れた際、日本と大きな違いはあまり感じませんでした。並べられている商品や雰囲気も日本と近く、むしろ親しみやすさを覚えました。ただし、規模の大きさや商品のパッケージデザインなどには、アメリカらしさを垣間見ることができました。

#### 【2日目】

午前中は主にレクチャーを受けました。特に印象に残ったのは、私と同じソフトウェアエンジニアである原健太さんのお話です。学生時代に自作のゲームを開発していたこと、起業を経て海外企業に引き抜かれた経歴など、その歩み自体が非常に刺激的でした。さらに現在は、日本酒を世界に広めるためのアプリや仕組みを開発しており、自らの信じる道を突き進む姿勢に強い憧れを抱きました。

午後は、Apple Park Visitor Center や Google Visitor Center を訪問した後、チームでアポイントメントを取っていた Nvidia の Ken Okada さんにお話を伺いに行きました。事前に社内に入れると聞いてはいたものの、実際に入場できたことには驚きを覚えました。見学できる範囲には制限がありましたが、社内にはバーやレストランが併設されており、社屋は緑豊かで快適な環境が整っていました。



岡田さんからは主に AI や働き方、趣味など幅広いテーマについてお話を伺いました。特に AI に関する内容は非常に興味深く、すでに業務だけでなく日常生活においても欠かせない存在となっていることを実感しました。その活用方法についても多くの示唆を得ることができ、大いに参考となりました。

### 【3日目】

スタンフォード大学にて視察やショッピング、アンケート調査などを行いました。学内は非常に広大で、多様な人々が思い思いに活動している様子が印象的でした。視察中、偶然大学の教授の方に声をかけていただきました。当初は英語での会話に不安があった



が、メンバーと協力しながら何とか意思疎通を図るうちに、校内を少し案内していただけることになりました。教授は宇宙分野を専門としていたとのことで、直前まで NASA 関係者と話をしていたと伺い、大変驚きました。また案内の途中にはお母様に電話をかけるなど、とても気さくでオープンな性格の方であったことも強く印象に残っています。

このように、見ず知らずの外国人に自ら声をかけ、案内までして下さる姿勢は、日本ではあまり見られない文化であると感じました。

### 【4日目】

サンフランシスコでフィールドリサーチを行い、現地の方々にアンケートを実施しました。まずゴールデンゲートブリッジを訪れ、偶然観光中の日本人の方々に会うなどの出来事もありました。橋周辺はロードバイク専用の通行スペースが整備されており、ここを走ったら爽快だろうなと感じました。都市のデザインや人々の移動スタイルから、健康志

向やアクティブな生活文化が根付いていることに気づきました。

その後、個人的に Star Wars が好きなこともあり、Lucasfilm を訪問しました。事前研修で話し合った際には、他のメンバーがあまり詳しくなさそうだったため候補から外すことも考えましたが、快く承諾してくれたので訪問することができました。

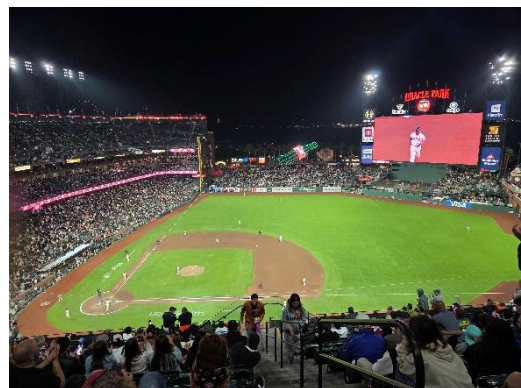
お昼はフィッシャーマンズワーフで食事を取り、午後はユニゾンスクエアガーデンにてアンケート調査を行いました。現地までは Waymo という無人タクシーで移動しました。運転手がないことや本当に目的地に到着できるかが不安で、とても不思議な気持ちになりましたが、無事に現地に到着することができました。自動運転技術の実用化レベルの高さに驚くとともに、Waymo が日本に上陸する日が待ち遠しく感じました。



アンケートはこちらから話しかける形で実施しました。最初はどうも会話できるか不安でしたが、つたない英語でも伝えようと努力し、現地の方も理解しやすいように話してくれました。この過程で、文化的背景や言語の違いを超えてコミュニケーションをとる重要性を実感しました。ここで多種多様な方々に調査を行うことができ、現地

の人々の価値観や考え方を直接知る貴重な機会となりました。

夕方からはオラクルパークでジャイアンツ対カブスの試合を観戦し、野球観戦を楽しむことができました。映像で見るよりも迫力があり、生での観戦ならではの臨場感を体験しました。また、観客の熱気や応援の盛り上がりから、今も野球がアメリカ文化の重要な一部であることを感じました。球場からホテルへの移動はカルトレインを利用しましたが、電車の到着時刻がかなりずれており、アメリカらしい柔軟性と時間感覚の違いを肌で感じることもできました。生活の柔軟性や文化の多様性など、さまざまな発見があった一日でした。



## 【5日目】

最終日はプレゼンテーションの発表準備を行い、今回の研修を通してチームで考案した「AI」サービスの提案を行いました。これまで資料を読みながら発表した経験はありましたが、今回はスライドのみを用い、メモは作らず自分の言葉で話すことを意識して発表を行いました。この形式には慣れていなかったため、発表時間が予定より長くなったことや、動きが少なかったことなど、いくつかの課題点が見つかりましたが、個人的には良い経験になったと感じています。プレゼン後は、今回アポイントを取ったさまざまなチームの現地関係者も交えて懇親会を行いました。ここではGoogleやMetaの社員の方々とお話をすることができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

## さいごに

今回のシリコンバレー研修を通して、技術面や文化面の両方で多くの学びを得ることができました。AIの最先端事例に触れたことや、現地でのコミュニケーションを通して異文化理解を深めたことは、今後の業務やキャリアに大いに役立つと感じています。また、チームで協力して課題に取り組み、プレゼンテーションを行った経験は、自分自身の成長につながったと実感しています。この研修で得た知見をもとに、今後のプロジェクトやチーム活動に活かしていきたいと考えています。

## 公立小松大学産官学合同シリコンバレー研修報告書

株式会社日本オープンシステムズ 深川 志帆

### 1. はじめに

今回の研修には社会人枠として参加させていただき、事前研修から同じグループとなった学生の方々と共に日本とアメリカの食の違いをテーマとして活動を行いました。

### 2. グループ活動

#### 【スタンフォード大学でアンケート調査】

スタンフォード大学を訪問し、通行人の方に食文化に関するアンケートを実施しました。あらかじめ画用紙に質問を準備し、「簡単なアンケートです」と声をかけることで、想像以上に多くの方に協力していただきました。学生の方々が積極的に声をかけている姿に刺激を受け、私自身も勇気を出して声をかけることができました。

#### 【サンフランシスコでのフィールドリサーチ】

サンフランシスコではバスやフェリーを利用して移動しました。フィッシャーマンズワーフでは名物のクラムチャウダーを食べ、日本の漁港とは異なる開放的で観光色の強い雰囲気を楽しむことができました。さらにアルカトラズ島では歴史的な刑務所の内部を見学し、食文化以外にもアメリカの社会背景に触れる機会となりました。



画像 2 島へ向かうフェリー



画像 1 アルカトラズ島の監房

### 【スーパーマーケットの視察】

滞在中は Uber を活用し、Safeway、Trader Joe's、Walmart、Whole Foods、Mitsuwa Market など現地のスーパーを訪れました。従業員の方や Uber の運転手の方にも質問を行い、現地の方々の食への関心を知ることができました。

各スーパーにはそれぞれ特徴がありましたが、共通してオーガニック商品を強調していた点が印象的でした。パッケージやラベルにもオーガニックであることが明記されており、健康志向が広く浸透していることを感じました。そのうえで、Whole Foods では量り売りが充実しておりフードロス削減への意識が見られました。一方、Trader Joe's はコンパクトな規模ながらオリジナル商品やグッズを展開し、消費者を惹きつける独自の魅力がありました。

さらに最終日に訪れたアメリカで最大の日系ショッピングセンターチェーンである Mitsuwa Market では、ヒロさんにご紹介していただき店長の岸本さんにお話を伺いました。利用客は日本人やアジア系に加え、日本文化に関心を持つ現地の方まで幅広いようでした。価格面では関税などの影響もあるものの、「ここでしか買えない」という魅力から支持されているようです。加えて、日本各地の食べ物のフェアや日本語の本を扱う本屋、日本にもあるガチャガチャ店などを配置することで、食を超えて文化全体を発信している点も印象的でした。日本食は文化的な価値に加えて経済的な可能性を持ち、今後も成長が期待できる分野であると感じました。



画像 3 Whole Foods



画像 4 Mitsuwa Market

### 3. 気づき

今回の活動を通じて、日本とアメリカの食文化には大きな違いがあるというよりも、共通して健康や環境への意識が高まっていることに気づきました。オーガニック商品や量り

売りなどはアメリカらしさを感じましたが、根本的には日本と同じように「体に良いものを選びたい」という思いがありました。両国それぞれに良さがあり、どちらも学ぶ点があると感じたことが今回の一番の収穫でした。さらに、食は文化的な価値だけでなく経済的に大きな可能性を持つことを学びました。

#### 4. 感想

研修を通じて、初対面の現地の方へ話しかける機会が多々ありました。はじめは緊張が大きかったのですが、たくさんの方に笑顔で対応していただき、アメリカの方々の温かさを実感しました。学生の方々の積極的な姿勢に刺激を受け、自分も挑戦する勇気を持てたことは大きな経験でした。また、朝から夜までグループで行動し、年齢や立場を超えて意見交換できたことも貴重な体験でした。学生の柔軟な発想や積極性から学ぶことが多くあり、自分の行動を振り返る良い機会となりました。研修に参加する前は不安が大きかったのですが、自分の足で現地に行き体験したことで、多くの学びや発見を得ることができ、不安を楽しみに変えられることを実感しました。これからも失敗や緊張を恐れず、新しいことに挑戦していきたいと思います。

最後に、研修に関わってくださった皆さまに心より感謝申し上げます。このような貴重な経験の機会をいただき、本当にありがとうございました。

## シリコンバレー研修報告書

株式会社日本オープンシステムズ 堀岡 ひなの

### 1. はじめに

今年4月にご縁をいただき、シリコンバレー研修に参加させていただきました。海外渡航は初めての経験だったため、不安な気持ちもありましたが、この研修を通じてアメリカと日本の文化の違いや、最先端技術を実際に体感したいという思いが強くなり、積極的に取り組むことができました。

### 2. 事前研修

6月18日、公立小松大学にて今回の研修に参加するメンバーとの初顔合わせが行われました。初対面の学生や企業の方々とその場でグループを組むことになり、新鮮な気持ちで取り組みました。第2回の事前研修では、グループごとに研修のテーマを決定しました。私たちのグループは、「今後のAIとの付き合い方」というテーマを掲げ、仕事や災害など、さまざまな分野からAIの活用や課題について調査・議論を行うことにしました。

### 3. シリコンバレーでの体験

#### i. 文化の違い

アメリカに到着してまず感じたのは、日常生活における文化や環境の違いでした。たとえば、道路の広さや歩行者信号の仕組みが日本とは異なっており、戸惑う場面も多くありました。



現地の歩行者信号。歩行可能になると青信号ではなく赤い信号の隣にカウントダウンが表示される

また、サンフランシスコ市内の広場では、誰もが自由に使える無料の遊具があり、子どもから大人までが気軽に交流できる空間が設けられていました。公共スペースの使い方や、人々のオープンな関わり方に感銘を受けました。



ユニオンスクエアの中央にある自由に使用できる遊具

ii. 現地での生活

英語が得意ではない中での生活は不安もありましたが、現地の方々が親切にサポートしてくださり、言葉に頼らずともジェスチャーなどで気持ちを伝える工夫を重ねることで、意思疎通が可能であると実感しました。国や言語が違って、コミュニケーションの本質は「伝えようとする姿勢」だと強く感じました。

iii. 訪問施設での学び ～三育学院サンタクララ校～

今回の研修では、渡航前に各グループで現地訪問のアポイントを取り、実際に訪問を行いました。私たちのグループは、三育学院サンタクララ校という現地の日本語学校に連絡を取り、やり取りを重ねた末、訪問の許可をいただくことができました。

現地では実際の授業の様子を見学させていただきました。授業内容は日本の教育と大差ないものの、見学後に校長先生にお話を聞くと避難訓練の方法に大きな違いがありました。日本では刺股などを使って不審者を「制圧」する想定 of 訓練が行われることが多いのに対し、現地では「身を隠して安全を確保する」ことに重点を置いているとのことで、安全に対するアプローチの差に文化や環境の違いを感じました。また、お話の中で「AIを教育にどう活用しているか」と伺ったところ、「子どもたちの考える力を育てるため、教育の中ではあえて使っていない

い」とのお話がありました。AIは主に教員の事務作業の効率化などに活用されているとのことで、教育におけるAIの役割について慎重に見極めている姿勢が印象的でした。

iv. 現地の日本人との交流

現地で働く日本人の方々の講演や座談会に参加する機会がありました。どのような経緯で渡米し、どのように現地でキャリアを築いてこられたかお聞きする中で、「好きなことを仕事にしている方が多い」という印象を受けました。

また、AIに対する考え方や使い方も人によって異なり、積極的に仕事に取り入れている方もいれば、「あくまで道具として必要な場面にのみ使う」といった慎重な姿勢の方もいらっしゃいました。このように、技術に対する向き合い方が一様ではないことを知り、AIを含めたテクノロジーとの関わり方には多様な考え方があるということを実感しました。日本とは異なる働き方やキャリア観に触れ、今後社会で求められる柔軟性や主体性についても考えさせられる貴重な経験となりました。

4. 今後のAIとの付き合い方を考えて

今回の研修では、事前研修のテーマであった「今後のAIとの付き合い方」について、シリコンバレーでの実体験を通して深く考えることができました。

現地で見たAI技術は、単なる効率化のツールという枠を超え、社会課題の解決に積極的に活用されていることが印象的でした。たとえば、Waymo（ウェイモ）による自動運転は、高齢者による運転事故の防止や、交通インフラの整備が難しい地方での移動手段として、非常に大きな可能性を持っていると感じました。



### Waymo（ウェイモ）の外見と車内

研修中、何度も出たキーワードが「AIに依存するのではなく、いかに上手に活用するか」という考え方です。これは、AIに任せきりになるのではなく、人間の判断や倫理観を持ちながら、目的に合わせて使いこなす姿勢が重要であると改めて認識しました。

今後は、AI技術に対して受け身でいるのではなく、その仕組みや限界を正しく理解したうえで、地域や社会の中でどう活かしていくかを主体的に考える意識が重要だと実感しました。私自身も将来、こうした技術を地域の課題解決に結び付けられるような立場で関わっていきたいと考えています。

#### 5. おわりに

今回のシリコンバレー研修を通して、日本では体験できないような最先端の技術や多様な文化に直接触れることができ、自分の視野が大きく広がりました。

また、事前研修で掲げた「今後のAIとの付き合い方」というテーマについても、実体験を通じて深く考えるきっかけとなりました。AIに依存するのではなく、私たち自身がどのように活用し、社会に取り入れていくか。その姿勢がこれからの時代には求められているのだと、現地での学びから強く感じました。

最後に、今回貴重な機会を頂いた公立小松大学、小松市、B-Bridgeの皆様に感謝いたします。

## 2025 年シリコンバレー研修報告書

ナック・ケイ・エス株式会社 海道 晃生

### 1. この研修に参加した動機

今回私がシリコンバレー研修に参加した理由は、人生初の海外体験をただ遊んで過ごすのではなく今後の人生を形成する礎としたかったためである。そのため、立派なエンジニアとなるには、世界の産業の中心とも言えるアメリカのシリコンバレーの地で活躍する人々と交流することにより日本国内で生活している中では得難い経験を積み今後のヒントとなるのではないかと参加した。また、私が初対面の人たちと協力し異なる言語、異なる人種、初めて訪れる土地の中でも積極的に参加できるのか自分自身を確かめるためにも今回の研修旅行に尽力しようと考えた。

この貴重な体験を無駄にしないためにも、今回の研修で何処か一点でも自分自身の考えが更新できるよう、小さな発見でも見逃さないように研修に挑んだ。

### 2. 活動内容

私たちのグループは今回、アメリカの中でも多様な人種の集ってくるサンフランシスコのシリコンバレーの地にて日本とは異なった生活習慣に目を向けた。私たちのグループは食への関心が強かったためグループのテーマは食と AI での関連で考案した。最先端な環境にて活躍する人たちにはどのような基礎的な生活の上で結果を残していつているのか関心を向けた。最終的には生活習慣が最も出てくる場所として『アメリカと日本のショッピングセンターにおける AI 利用の違い』を着目点として今回研修に取り組んでいった。さらには、ショッピングセンターでの聞き込みや観察、スタンフォード大学でのアンケートを通じて会話の場を設けるべく事前にグループ内にて質問内容の案立てを話し合うなど事前の準備も数回の邂逅の場やオンライン通話にて行った。こうして、現地にて情報と体験を収集していき、最終的にはよりよい効率のための生活の為にはどのようなショッピングセンターが必要なのかを提案した。

### 3. 現地研修

現地での活動は参加者共通で行う企業研修やスタンフォード大学訪問と各グループにて事前にアポイントを取った人や現地に赴いておこなうグループワークを行った。

研修日程の詳細は以下のとおりである。

#### 【8月24日（日）】

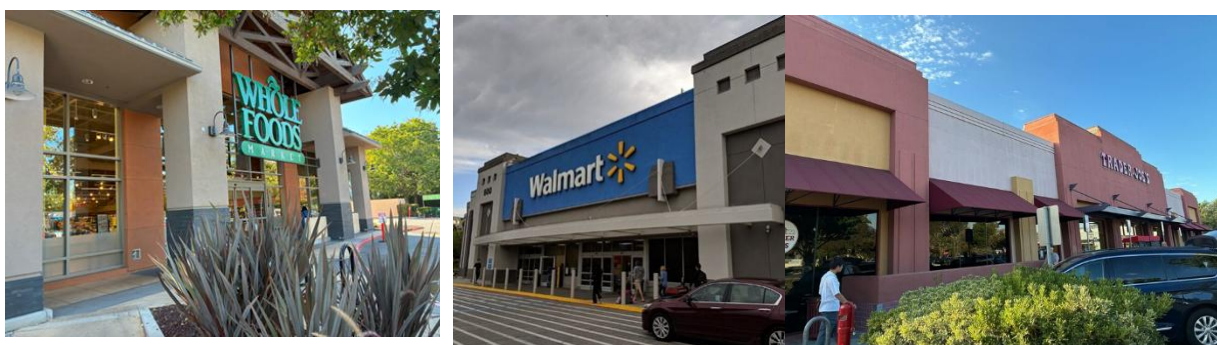
成田国際空港からサンフランシスコ空港へ向かった。サンフランシスコ空港到着後は、HiroさんとMiwaさんが出迎えてくれホテルまで向かった The Domain Hotel についてからはグループにて一週間の動きを再度確認したのちホテルの目の前の HANKOOK スーパー

マーケットに取材へ向かった。客層としてはアジア系の人たちがほとんどを占めており韓国や日本の商品が多く存在していた。レジは有人であり日本のものよりも大型であった。



### 【8月25日（月）】

午前中は applepark のビジターセンターや google の本社前のショップに訪れた。世界有数の企業は本来は働く場所さえ観光場所の一環となっており模型を用いた3Dマッピング技術や動植物の豊かな公園など日本の企業では作らないであろう環境を提供していた。その後は、自由行動の時間が設けられた。私たちはこの時間、スーパーマーケットへ取材へ向かった。WHOLEFOODSMARKET はオーガニック食品が多めということもあり量り売りの雑穀類や野菜も多く、オーガニックな素材をもちいた加工食品は今回回った他マーケットよりも若干高価格であった。Walmart は、とても大規模な店舗に多様かつ大量な商品数なスーパーマーケットであり、その多様な種類の商品の中には食品だけでなく家電や菜園用品、銃まで取り扱っておりアメリカでの生活に必要なものを一か所に詰め込んだような印象を受けた。TRADER JOE'S は、他のスーパーマーケットとは一風変わったスーパーマーケットであり少量の包装の商品は日本に近い雰囲気を感じとることができ自社ブランドの商品を低価格で提供する企業努力が見て取れた。



### 【8月26日（火）】

午前中にスタンフォード大学へ見学と学生へのアンケートを行った。定型文しかしゃべることが難しかったものの協力的な人が多く多数の回答を得ることができた。午後は、インテルミュージアムに行ったのち B-Bridge 訪れ研修において得られた体験を共有を行った。

夜にはアメリカスタイルの BBQ を行い今回の参加者の人たちとの交流を図ることができた。

【8月27日（水）】

フィッシャーマンズワーフを訪れたのちアルカトラズ島の船に乗船しアルカトラズの歴史の学習を行った。その後、海岸沿いの商店の巡回を行った。

【8月28日（木）】

午前中は、グループでの発表準備を行った。その後、アポイントを取ったアメリカの日系スーパーの一つであるミツワスーパーの岸本さんの話をお聞きした。アメリカの地で日本食全開にしたミツワスーパーは日本にいるような感覚を与えてきた。岸本さんの話によるとアメリカで売れていくためにはコンセプトが重要であり常に新しいものが生まれてくるなかでも埋もれないようにする努力が見て取ることができた。午後は研修から学んだことをまとめて発表した。その後、個人でも学んだことを1つ分にまとめて発表した。それぞれ全く異なる視点の発見があり興味深い内容であった。最後に、今回の研修に協力してくださった人たちとピザを囲みながらアメリカの生活について詳しく聞くことができた。

【8月29日（金）】

日本へ帰国した。



#### 4. 所感

今回、シリコンバレーの地に訪れ様々な人種がいる中でも適応している人々に力強さを感じることができた。また、シリコンバレーにすむ人たちは自身の長所を前面に押し出すことにたけており、人が多くいる中でも自分を埋もれさせないために重要なことを学ばせてもらえた。また、特定の職に執着することなくあっさり職が変わったり環境が変わっていることが当たり前な環境だからこそ常に新鮮なサービスを与えてくるのだと考えさせられた。

シリコンバレーでの研修を通じ得た経験は、今後の生活や学びにおいて重要なことは何かを改めて思考させる貴重な体験となりました。自身を自信をもって売り出すためにもまずは力や能力をつけていきたいです。

最後に、現地での体験の補助をしていただいた B-Bridge 様、小松大学の先生、学生の方々をはじめ今回の研修に携わっていただいた方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

# 産官学合同シリコンバレー研修報告書

小松市 総合政策部スマートシティ推進課  
事務員 隅山 彰久

## 1. はじめに

今年で5回目となる本研修は、PBL（課題解決型学習：Project Based Learning）を軸に、ハイテク産業やIT産業において時代の最先端を行くシリコンバレーにて知見を広め、各々のキャリアに繋げていくことを目的としている。

小松市からは3人目の参加となったが、参加のお声がけをいただいた際には驚きが大きかった。予期せぬお話だったため、自分の語学力などに不安要素は多々あった。一方で、元々研修の概要について把握していたこともあり、「またとないチャンスである」と感じたことから、選ばれたからには自分の最善を尽くしてみようと思い、参加を決意した。

## 2. 研修に向けて

研修に先立ち、顔合わせも兼ねた第1回事前研修が6月に実施された。そこで初めて本研修をサポートいただく榎本特任教授（B-Bridge International, Inc.）（以下親しみを込めて「Hiroさん」と称する）にお会いし、Hiroさんの気さくでフランクな人柄に触れ、研修への期待が膨らんだ。事前研修では「Proactive」に物事に取り組むことの重要性を学んだ。アメリカではスーパーに行くと店員から”How are you?”や”How’s it going?”と声を掛けられる。日本では馴染みないが、アメリカでは普通だという。シャイな日本人だと対応に困るが、本研修に参加するからには自分から声掛けするくらいの気持ちで、店員とコミュニケーションを取ってほしいと、研修初日に宿題をもらった。様々なお話があった中で、この宿題については非常に記憶に残るものとなった。

また、課題解決に向けて共に行動する班分けも行われた。我々は現地での“働き方”と“防災意識”の2軸をテーマに置き、研修先がシリコンバレーという地であることから、それぞれのテーマとAIについての結びつきについて考えることにした。

## 3. 現地にて

### 3.1 宿題の遂行

事前研修にて課された宿題を初日に体験することとなった。初日にスターバックスを訪れたところ、店員さんより挨拶を受けた。現地の方との初のコンタクトだったため、緊張もあり上手く聞き取ることができなかったが、“調子はどう？”というようなニュアンスを感じ取り、“so good!”と返答したところ、笑顔で反応してもらった。こちらからも”How are you?”と聞き返すことこそ出来なかったが、その一連のやり取りで緊張が和らぎ、初日

から自信を持つことができた。海外に慣れている方からすると何でもない行動だと思うが、自分にとっては、その小さな一歩を踏み出せたことが何よりもうれしく思えた。この成功体験が後々のアンケート収集や施設見学にも活きることとなり、研修全体への追い風となった。

### 3.2 アンケート調査

設定したテーマについて日本語版と英語版を作成し、日本人の意識と外国人の意識について比較することとした。アンケートはグーグルビジターセンター、スタンフォード大学、三育学院サンタクララ校の三か所にて行った。グーグルでは初めてのアンケート調査ということもあり、緊張しつつ社員の方々に話しかけたが、回答してもらうことができなかった。QRコード読込まではしてもらえたが、アンケートの意図を尋ねられた際、うまく説明できずにいると「工作中だから」と断られてしまった。思い返すと1件目に尋ねた際は流暢に尋ねることができず、リスニングも心配だったため、常にスマホを片手にアンケートに臨んでいた。そのような姿勢では印象が悪いなと思い、スムーズに説明できるようにその場で話しかけれる内容をまとめることにした。

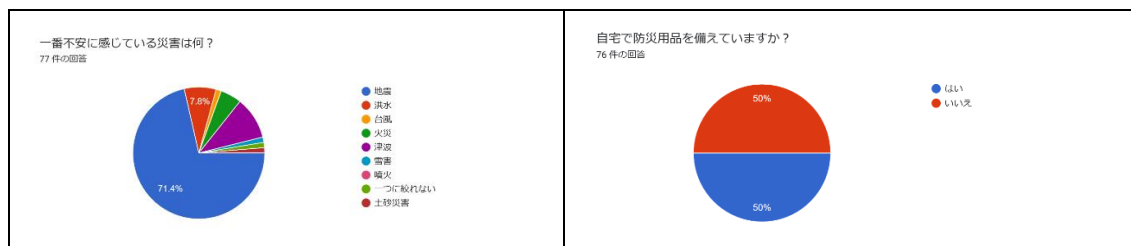
「I'm Japanese student.」

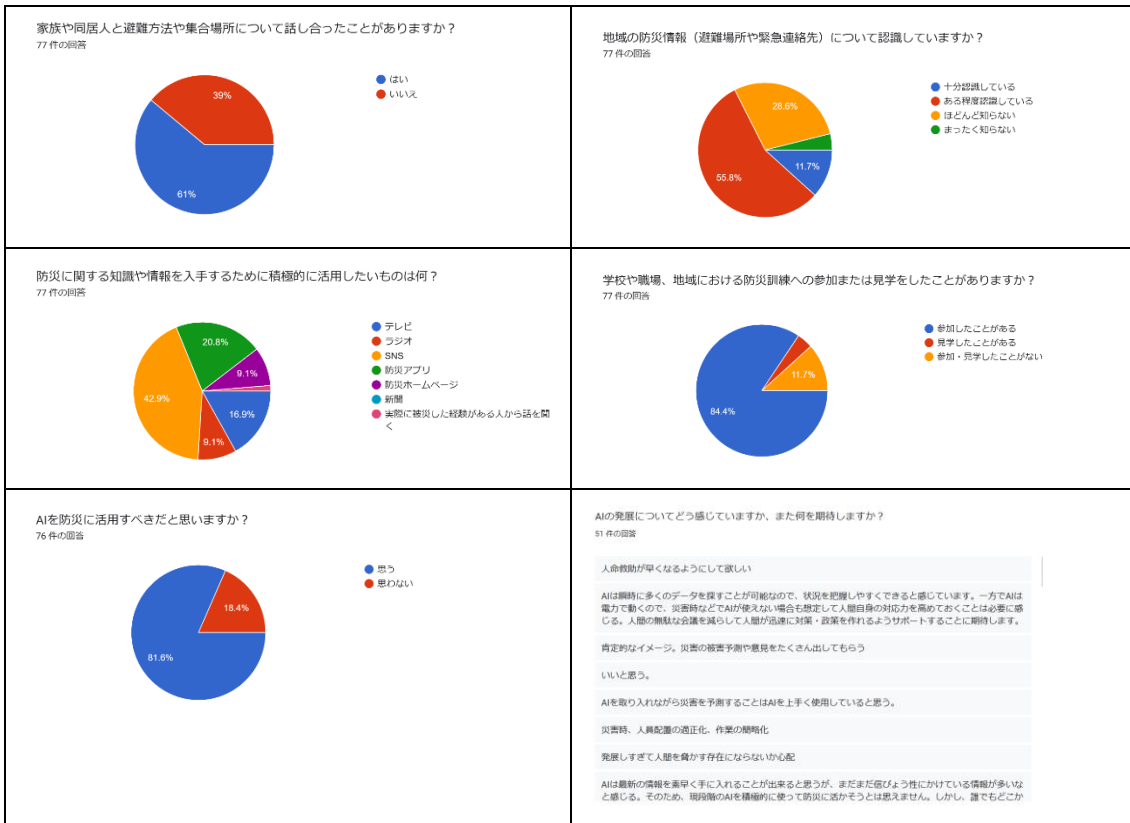
「I'm researching disasters at university, so could you help me with the survey for one minute?」

学生でもなければ災害について研究もしていないが、アンケート調査をするうえで必要最低限のことは伝えようと思い、この文章を繰り返し口にしながら暗記し、アンケートを続けた。結果、グーグルでは1件もアンケートを集めることは出来なかったが、質問内容を確認したことが自分にとって大きな自信となった。帰宅後はグループで打ち合わせを行い、質問数を絞ったうえで全て選択式の質問に変更することにした。スタンフォード大学では年齢が近いということもあり、アンケートに協力的な学生が多かった。初めてアンケートに回答してもらえた際はホッとしたとともに、昨日の結果があった分、非常に達成感を感じることができた。

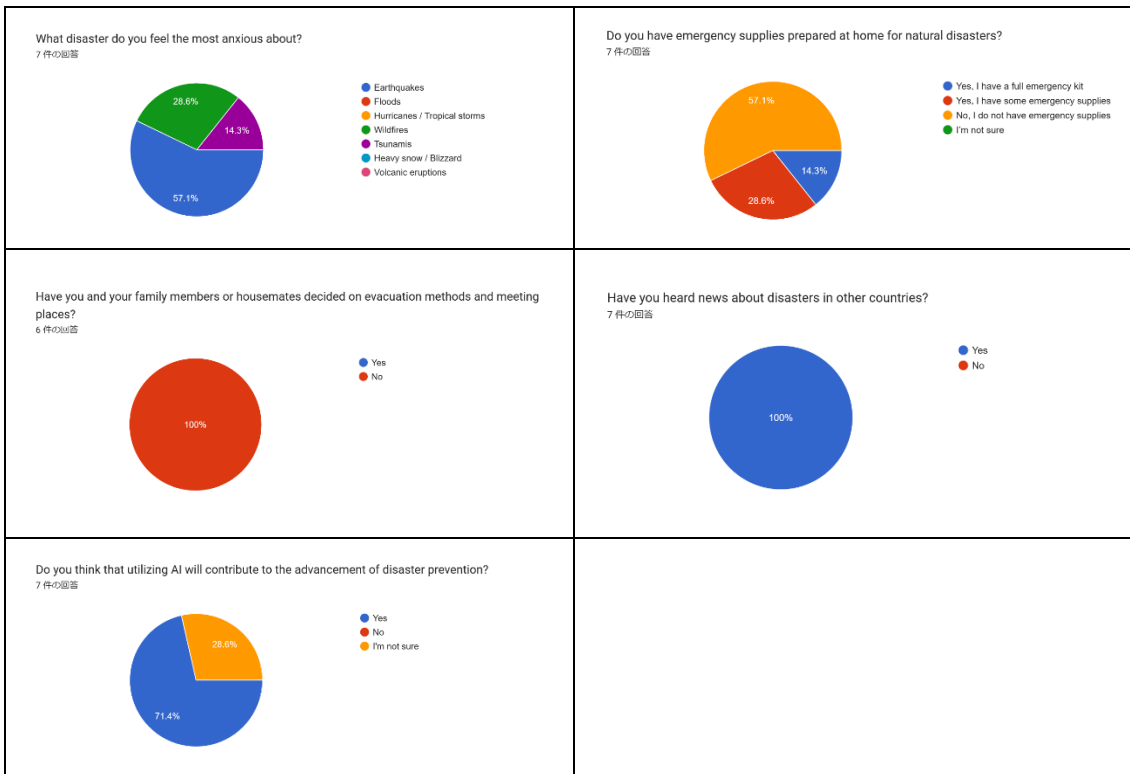
アンケートの内容と結果は以下の通りである。

#### 【日本語版】





## 【英語版】



日本語での回答が 77 件なのに対して英語での回答は 7 件だけとなってしまったが、実際にアメリカで生活する方々の意見を直接伺うことができただけでもアンケートを実施した意義があったように感じる。また、アンケートに協力してもらうために自ら考えて行動した経験こそが何より自分の糧になったように思えた。研修のテーマでもある「Proactive」というものを実際に発揮できた場であった。



	
<p>気さくに回答してくれたアンディー</p>	<p>実際にアンケートに使用した資料</p>

### 3.3 先進技術とシリコンバレー

本研修では現代の IT 産業を牽引する世界的企業の視察や先進技術を実際に体験することができた。

#### ■Apple

カリフォルニア州クパチーノに位置する Apple は円盤型の特徴的な Apple Park と呼ばれる本社があり、周辺には Apple ロゴマークが入った関連施設が立ち並んでいる。研修では観光客でも立ち入ることができる Apple Visitor Center を訪れた。中では Apple Park のジオラマが展示されており、貸出されている iPad をかざすと AR により内部の映像が映し出されるようになっていた。皆が実際に立ち入ることができなかった内部見学に夢中になっていた。展示一つにしても Apple の想像力と技術力を感じることができた。

	
<p>至って普通のジオラマだが...</p>	<p>iPad をかざすと実際の映像に！</p>

## ■Google

カルフォルニア州マウンテンビューに位置し、広大な敷地に関連施設が立ち並んでいる。Google でも本社に直接入ることは出来なかったが、Google Visitor Experience を見学した。とにかく敷地が広いため、従業員のためのバスや自転車が多く走っていた。ビジターセンターでは多くの Google 製品が展示されており、購買意欲を駆り立てられた。Google 実際に従業員の方々にお話を聞くことは出来なかったが、研修最終日の懇親会にて Google で勤められている鈴木さんとお話することができ、Google での働き方や社風など貴重なお話を伺うことができた。このような突発的な出会いがあるのも本研修の醍醐味だと言える。



至る所に Google カラー



Google Pixel 10 Pro の誘惑が...

## ■インテル

カルフォルニア州サンタクララに位置する Intel は誰もが知る世界最大の半導体メーカーである。本社 1F には博物館が併設されており、インテルの歴史や製造過程について学ぶことができる。ただ、今回の研修で訪れた日は休館日となっており、実際に見学をすることは出来なかった。企業見学の中では一番期待していた施設だったため、次回シリコンバレーを訪れる際は是非立ち寄りたいと思う。

## ■Waymo

Waymo とはサンフランシスコ近郊で運行している完全自動運転タクシーである。Waymo One と呼ばれるアプリにて配車予約を行うと、指定した乗車位置に Waymo が自動で到着し、指定した降車位置まで送迎する。その間に人の手は介在せず、予約→送迎→支払い全てが自動化されており、まさに子供の頃に思い描いた近未来型のテクノロジーがアメリカでは実装されていた。実際に乗車してみると、もちろん運転席には誰も乗っておらず、シートベルト着用を確認すると静かに目的地へと出発した。Waymo は車体に取り付けられた複数のカメラや搭載されているあらゆる機器によって無人運転を実現してい

る。停止・発進や右左折といった基本的な操作はもちろん、車線変更や合流といった複雑な操作も自動運転を感じさせないほどスムーズに行われていた。特に印象に残っているのが、交差点付近の右車線で路駐している車がいた時である。交差点付近ということで、信号待ちで停まっていると認識しても仕方ない状況だったが、Waymo は一旦停車した後、その車の前の状況を確認し、路駐車であると判断したうえで追い越しをかけていた。普通のドライバーでもボーっとしていたら勘違いしてしまいそうな状況だったにもかかわらず、Waymo は自前の先進技術で対応していた。個人的にあの瞬間がアメリカで一番感動した場面だったかもしれない。サンフランシスコではそんな Waymo 当たり前のように走っており、3 台以上並んで走行している姿も見られた。サンフランシスコではそれが日常であり、現在実証を行っている日本でも近い将来 Waymo が当たり前になることを期待したい。

日本での Waymo 普及を望む一方で、自分がドライバーの立場となったときの Waymo との共存について考えさせられた。Waymo は全くの無人走行なので、そこに走っているのは機械そのものである。Waymo は行動を走る以上、車線変更や合流を行うこととなる。もし自分が走っている車の前に Waymo が少々強引に車線変更や合流しようとしたときにどうか？何も考えずにスッと許容することができるだろうか？現在の日本ではドライバーがおり、会釈などのジェスチャーや正しい使われ方ではないが、サンキューハザード等でドライバー同士が意思疎通している。それはすなわち”人”対”人”の構図であるが、Waymo 相手となると”人”対”機械”の構図になる。Waymo 体験を経て、日本でも Waymo が当たり前になった際は考え方や価値観のアップデートをしていく必要があるなど考えさせられた。



#### 4. まとめ

「Proactive」というキーワードを胸に準備段階から研修に臨んできた。準備段階では現地の日本語学校とのアポイントメントを取り付けることができ、現地ではアンケート調査等を通して見知らぬ海外の方とコミュニケーションを図ることができた。向こうの方々はこちらの拙い英語に対しても常に理解しようと聞く姿勢を大事にしており、意図をくみ取ってくれる優しさを感じることができた。渡米前は現地の方々に対して、もっと冷たいイメージを持っていたが、研修を経て考えが180度変わることとなった。多様性を大事にする多民族国家アメリカを肌で感じることは自分にとって非常に価値ある経験となった。

また、Waymoをはじめとした先進技術を実際に見て聞いて体験したことで、改めてアメリカの凄さを思い知らされるとともに、今後の可能性について考えさせられることになった。自動運転の車が当たり前のように公道を走る。そんな夢物語のような光景がサンフランシスコでは実現されており、今後も更なる発展を続けていくだろう。研修を経て、アメリカに人・お金・技術が集まる理由が少しわかった気がする。

現地の方々との交流で得た知識や経験は自分にとっての大きな財産であり、今後の市政運営にも活かせるものだと思う。初めてのことに挑戦する際の準備や心構え、困難にぶつかったときの立ち回り方や意識改革など、研修を経て得たものを今後の業務を通して実践していきたいと思う。

#### 5. さいごに

本研修では普段関わることのできない方々とたくさん交流することができた。随行いただいた先生方や他企業の皆さま、公立小松大学をはじめとした様々な学生の方々と研修に関わることから仕事について、さらにはプライベートのことなど、短い研修の中で色々な話をすることができた。研修に参加したからこそその出会いだと思うので、この繋がりは大切にしていきたいと思う。

最後に、本研修開催にあたり尽力いただいたB-Bridge社の皆さま、公立小松大学の皆さまをはじめとすご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。

また、チーム switch として一緒に研修を盛り上げてくれた堀岡さん、川辺君、獅十君、谷内さんにも感謝申し上げます。本当にありがとう！